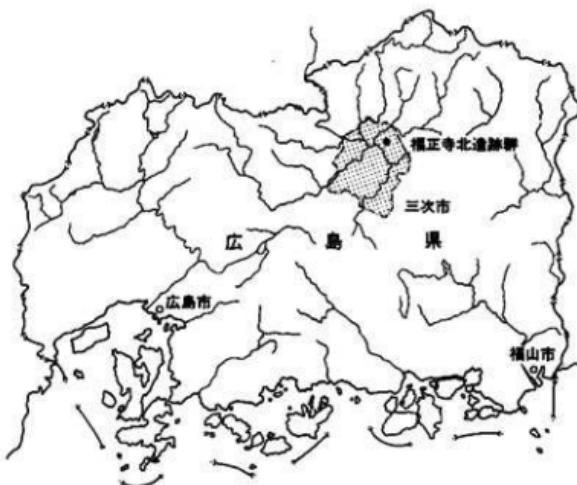


福正寺北遺跡群

1990

福正寺北遺跡群



1990

財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター



a. 福正寺北 2号遺跡基壇検出状況（南西から）



b. 福正寺北 3号遺跡SK1木棺出土状況（南東から）

例　　言

1. 本書は、平成元（1989）年度に発掘調査を実施した県営ば場整備事業（和知地区）に係る福正寺北1～5号遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、広島県教育委員会と広島県三次農林事務所から委託を受けて財団法人広島県埋蔵文化財調査センターが実施した。
3. 調査は、松村昌彦・藤田広幸・大上裕士が行った。
4. 遺構の実測・写真撮影は上記の3名が行い、出土遺物の実測・製図及び写真撮影は、藤田・大上、本書の執筆・編集は藤田が行った。
5. 出土遺物のうち石器・石塔の石質については、広島大学理学部地質鉱物学教室の柴田喜太郎氏から御教示を頂いた。
6. 遺構の表示記号は次のとおりである。

S B：掘立柱建物跡

S A：櫛列

S K：土壤

S D：溝状遺構

S X：性格不明遺構

7. 本文中に使用した方位は第1図を除きすべて磁北である。レベルは海拔標高で示した。
8. 「第1図 周辺遺跡分布図」は、建設省国土地理院発行の1:25,000の地形図（三良坂）を使用した。
9. 挿図と図版の遺物番号は同一である。
10. 福正寺北1号遺跡は、調査前には福正寺北1号古墳と称し、福正寺北2～5号遺跡は、福正寺北2～5号古墓とし、これらを総称して福正寺北古墓群と称していたが、性格などが異なることから名称を福正寺北1～5号遺跡に変更するとともに、これらを総称して福正寺北遺跡群とした。

本文目次

I.はじめに.....	1
II.位置と環境.....	2
III.調査の概要.....	6
IV.福正寺北1号遺跡	
1.遺跡の概要.....	8
2.遺構と遺物.....	9
3.小結.....	9
V.福正寺北2号遺跡	
1.遺跡の概要.....	10
2.遺構と遺物.....	11
3.調査区出土の遺物.....	16
4.小結.....	18
VI.福正寺北3号遺跡	
1.遺跡の概要.....	20
2.遺構と遺物.....	22
3.調査区出土の遺物.....	24
4.小結.....	24
VII.福正寺北4号遺跡	
1.遺跡の概要.....	26
2.遺構と遺物.....	27
3.小結.....	31
VIII.福正寺北5号遺跡	
1.遺跡の概要.....	33
2.遺構と遺物.....	33
3.小結.....	34
IX.まとめ.....	36

図版目次

- 巻頭図版 a. 福正寺北 2 号遺跡 基壇検出状況（南西から）
b. 福正寺北 3 号遺跡 SK 1 木棺出土状況（南東から）
- 図版 1 a. 遺跡群遠景（南から）
b. 同上（西から）
- 福正寺北 1 号遺跡
- 図版 2 a. 調査前近景（北から）
b. 調査状況
- 図版 3 a. 土層断面（北西から）
b. 調査後全景（北西から）
- 福正寺北 2 号遺跡
- 図版 4 a. 調査前近景（西から）
b. 調査状況
- 図版 5 a. 調査後全景（西から）
b. 調査状況
- 図版 6 a. 基壇・石列検出状況（東から）
b. 基壇検出状況（西から）
- 図版 7 a. 基壇土除去後（西から）
b. SA 1（南から）
- 図版 8 a. 基壇南辺部（西から）
b. 同上南東隅（南西から）
- 図版 9 a. SK 1～5（西から）
b. SK 2（北西から）
- 図版 10 a. SK 3（北西から）
b. SK 4（北西から）
- 図版 11 出土遺物
- 福正寺北 3 号遺跡
- 図版 12 a. 調査前近景（西から）
b. 調査状況
- 図版 13 a. 整地土上面調査後全景（南から）
b. 地山上面調査後全景（西から）
- 図版 14 a. SK 1 検出状況（北から）
b. 調査状況
- 図版 15 a. SK 1 木棺・人骨出土状況
（南から）
b. 同上除去後（東から）
- 図版 16 a. SX 1 磁検出状況（北東から）
b. 同上疊除去後（北東から）
- 福正寺北 4 号遺跡
- 図版 17 a. 調査前近景（西から）
b. 調査状況
- 図版 18 a. 調査後全景（北東から）
b. SK 1（南東から）
- 図版 19 a. SK 2 検出状況（北西から）
b. SK 2・4（東から）
- 図版 20 a. SK 3（西から）
b. SD 1 検出状況（北東から）
- 図版 21 a. SX 1 検出状況（南東から）
b. 出土遺物
- 福正寺北 5 号遺跡
- 図版 22 a. 調査前近景（南西から）
b. 調査後全景（西から）
- 図版 23 出土遺物

挿 図 目 次

第1図 周辺遺跡分布図 (1:25,000)	3
第2図 周辺出土石器実測図 (1:4, 1:2)	4
第3図 遺跡群周辺地形図 (1:5,000)	5
第4図 遺跡群調査区位置図 (1:1,000)	7
福正寺北1号遺跡	
第5図 地形測量図 (1:200)	8
第6図 土層断面実測図 (1:100)	9
福正寺北2号遺跡	
第7図 遺構配置図 (1:100)	10
第8図 基壇・SB1・SA1実測図 (1:60)	折込み
第9図 基壇・SB1・SA1断面図 (1:60)	13
第10図 SA1出土磁器実測図 (1:3)	14
第11図 SK1~5実測図 (1:30)	15
第12図 調査区出土の土器実測図 (1:3)	16
第13図 調査区出土の石塔実測図 (1:8)	17
第14図 調査区出土の石製品実測図 (1:8)	18
第15図 調査区出土の石器実測図 (1:3)	18
福正寺北3号遺跡	
第16図 遺構配置図 (1:100)	20
第17図 SK1実測図 (1:30)	21
第18図 SX1実測図 (1:30)	23
第19図 調査区出土の石塔実測図 (1:8)	24
第20図 調査区出土の鉄器拓影 (1:1)	24
福正寺北4号遺跡	
第21図 遺構配置図 (1:100)	26
第22図 SK1~4実測図 (1:30)	28
第23図 SK1~3出土鉄器実測図 (1:2)	29
第24図 SD1実測図 (1:40)	30
第25図 SX1実測図 (1:20)	31
福正寺北5号遺跡	
第26図 調査区位置図 (1:200)	33
第27図 土層断面実測図 (1:60)	34
第28図 調査区出土の石塔実測図 (1:8)	35

I. はじめに

広島県三次農林事務所（以下「三次農林」という。）は昭和55（1980）年から三次市和知町において県営ほ場整備事業（和知地区）を実施している。

本事業は、計画地域内のは場整備と合わせて道路・用排水路を完備することにより、中大型一貫機械体系を確立して労働生産性の向上を図り、専業農家の育成を目指し、農地の集積を行うとともに複合経営に改善して、安定した自立経営農家を育成しようとするものである。

三次市農政課は、昭和54年2月、三次市教育委員会（以下「市教委」という。）に、事業計画地域内の埋蔵文化財の有無及び取扱いについての照会を行った。市教委は同年、広島県教育委員会（以下「県教委」という。）に事業計画地域内の分布調査を依頼した。県教委はこれを受けて、昭和55年に試掘調査を実施し、昭和56年度工事区域（菅田工区）内で深茅遺跡を確認し、同年8月、市教委が発掘調査を実施した。その後、三次農林は、昭和62年10月、県教委に大当工区内の埋蔵文化財の有無及び取扱いについての照会を行った。県教委はこれを受けて、同工区内の踏査を実施し福正寺北1～3号遺跡・上大繩古墳などを、同年11月には下の割遺跡、翌年11月には福正寺北4・5号遺跡を確認し、これらの遺跡の取扱いについて三次農林と協議を重ねたが、設計変更などによる現状保存は困難なため事前に発掘調査を行うことになった。昭和63年度の上大繩古墳・下の割遺跡の調査は、文化庁と農林省との協議に基づき文化庁から各都道府県教育委員会に通知の「農業基盤整備事業等と埋蔵文化財の保護との関係の調整について」（昭和50年10月20日府保記第211号）により、経費の農家負担分（20%）を広島県立埋蔵文化財センターが、事業者負担分（80%）については、三次農林から委託を受けて財団法人広島県埋蔵文化財調査センター（以下「財団センター」という。）が実施し、報告書を作成した。

平成元年度の調査（福正寺北遺跡群）については、三次農林と県教委が協議の結果、県教委が前述の文化庁と農林省の協議に基づく経費の農家負担分についての調査を財団センターに依頼し、財団センターは三次農林から依頼の経費の事業者負担分と併せて、4月10日から8月4日まで実施した。なお、7月29日には、市教委と共に遺跡見学会を実施した。

なお、発掘調査にあたっては、県教委の指導を得るとともに三次農林、三次市和田土地改良区、広島県立歴史民俗資料館、市教委、地権者の池田省吾、佐藤逸二の各氏や地元の方々から多大な御協力を得ることができた。明記して謝意を表したい。

II. 位置と環境

霧の海で知られる三次市は、広島県の北部に位置する県北の中核都市である。地形は盆地でありこのため気温の較差は大きい。この盆地は三次盆地と呼ばれ、北側には400～500mの中国山地に連なる山々が、南側は馬洗川・西城川・江の川が形成した樹枝状の丘陵が広がっている。

三次市には、4,000基以上の古墳の存在が知られている。この古墳の数は、県内で知られている約5割にあたり古墳の密集地帯を形成している。また、古墳だけでなく弥生時代から歴史時代の遺跡についても多数知られ、近年の開発などに伴う調査により興味深い資料が蓄積されてきており、この地域の原始・古代の状況が明らかになりつつある。

ところで、三次市は古くから山陽と山陰を結ぶ交通の要衝となっていた。また、古代の三次郡衙跡と考えられる下本谷遺跡の存在や、近世に広島藩の支藩である三次藩が設置されるなど県北部の政治的な中心地であった。

この地域では昭和30～40年代に、高度成長のあおりを受け深刻な過疎化現象がみられた。しかし、現在では中国自動車道の開通により山陽と山陰だけでなく、近畿から九州を結ぶ接点となり、内陸部における工業化を目指し工業団地の造成が進められ就業機会拡大の条件整備が整ってきてている。また、広域的利用を目的とした公園などの文化施設の充実が図られ、地域の活性化が促進されている。

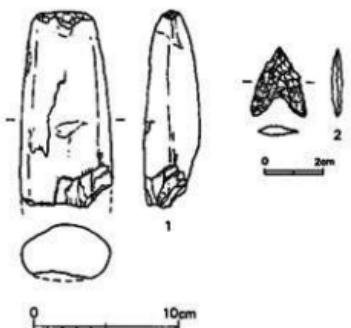
今回調査を実施した三次市和知町は、市域のほぼ東端に位置し、遺跡密集地帯の一角を占めている。遺跡の多くは、南西に向かって流れる国兼川によって形成された河岸段丘上や丘陵上などに位置している。現在この地域は水田地帯となっているが、現代の条里制とでもいいくべきは場整備や、各種の開発が行われており歴史地理的景観は失われつつある。昭和63年度には、上大繩古墳・下の割遺跡の発掘調査が実施された。上大繩古墳は、全長約26m、円丘部の径約19.5mの規模で円丘部の両側に方形部（造出部）を有することから双方中円墳とも考えられるが、方形部の規模などから帆立貝形古墳の範疇で考えられている。遺物は埴輪（円筒埴輪・朝顔形埴輪）、土師器（壺・高杯）が出土しており、時期は立地・出土遺物などから概ね5世紀後半頃と考えられている。下の割遺跡は、上大繩古墳の北約500mに位置し、A～D区の4箇所を実施した。検出した主な遺構には、掘立柱建物跡や土壙がある。特にD区で検出したSK13は、県内では初例の錫杖頭のほか短刀・刀子・土師質土器が出土し、副葬品から修驗者などの墓と考えられた。周辺には寺跡の存在が推定されており、これとの関わりが想定されている。また、この調査では、繩文時代から近



第1図 周辺遺跡分布図 (1 : 25,000)

A. 福正寺北邊跡群

1. 宮祖北古墳
2. 宮祖遺跡
3. 後原古墓
4. 宮祖南古墳
5. 宮祖古墓
6. 弁天東古墳群
7. 弁天北古墳群
8. 下の割連跡
9. 弁天古墳群
10. 須吹古墳群
11. 大鳴古墳群
12. 上大鶴古墳
13. 大當瓦窯跡
14. 福正寺古墳群
15. 大鳴古墓群
16. 福正寺古墓
17. 寺の前古墓
18. 西原田2号遺跡
19. 河原田1号遺跡
20. 濱戸越北古墳
21. 濱戸越中古墳
22. 西原田古墳群
23. 茶臼山城跡
24. 濱戸越古墳群
25. 古城城跡
26. 下山手連跡
27. 野槌北古墳群
28. 野槌土居跡
29. 野槌南古墳群
30. 日高古墳群
31. 下山手古墳群
32. 天神古墳群
33. 寺町鹿寺跡
34. 向ノ原古墳群
35. 上山手古墳跡
36. 古城山城跡
37. 薩萬古墳群
38. 和知氏館跡
39. 國広山古墳群
40. 國広山城跡
41. 成政古墳群
42. 南山城跡
43. 下山向古墳群
44. 大久保古墳群
45. 円納古墳群
46. 円納古墓
47. 深茅遺跡
48. 天良山城跡
49. 高保古墳群



第2図 周辺出土石器実測図 (1は1:4、
2は1:2)

が始石刀斧と考えられる。全体に風化がみられる。石質は凝灰岩である。2は無茎の石鎧で、重さは1gである。石質は黒曜石である。

古墳時代については、和知町の深茅遺跡において、古墳時代から古代の集落跡が確認された。古墳は付近の丘陵上に多く知られているが調査されているものは少なく、和知町北西に接する、四拾貫町の上四拾貫古墳群などが調査されている。

古代においては、「日本靈異記」に記載の三谷寺に比定され、法起寺式の伽藍配置である向江田町の寺町廃寺跡がある。また、同じ頃に創建されたと考えられ、金堂が二重基壇である上山手廃寺跡が知られている。和知町の大当瓦窯跡はこの寺町廃寺に用いられた瓦を焼いた窯と考えられている。なお、今回の調査で、福正寺北1号遺跡の北側から大当瓦窯で焼かれたと考えられる鶴尾の小片を表面採集した。和知町の羅漢遺跡群からは、平安時代の石敷造構が確認され、猿投窯系の綠釉陶器の耳皿などが出土している。

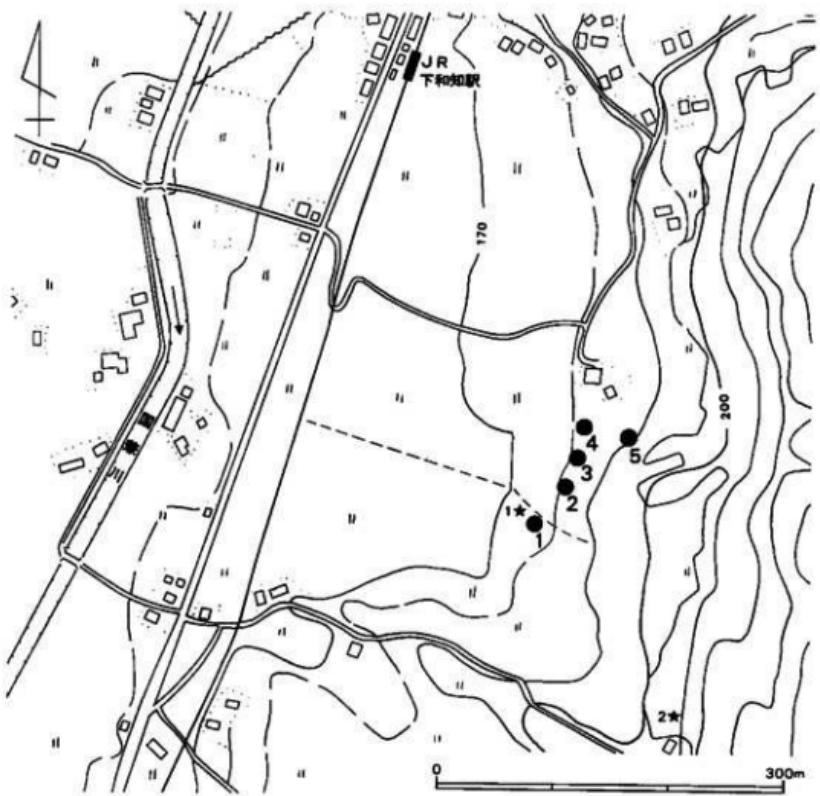
鎌倉時代には、広沢氏（後に和智氏と江田氏に分立）が三谿郡12郷の地頭として西遷しており、この地域に館や山城を構築したと考えられるが文献などが少ないため不明な部分が多い。しかし、和知町の古城^{じょうきやま}山城跡は、立地・出土遺物から広沢氏に関係があると考えられ、また、付近には「土居」の地名があり館跡の存在が推定されている。戦国期になると、この地域は山内氏の支配地となるが、尼子氏の南下や毛利氏の北上により和知町の国^{くに}広山城跡や同町の二ツ山城跡など多くの山城が築城され、この地域の社会的な不安定さが窺える。このような状況は、毛利氏が中国地方を支配するまで続いている。

古墓については、段丘上を中心和知町の福正寺古墓・同町の寺の前古墓などが知られているが実態については不明である。現在、これらの古墓の周辺では水田が営まれている。

世までの遺物が出土しており、これらの出土遺物の中で、縄文時代晚期・弥生時代前期の土器は和知町内では初例である。

このほかに、周辺で調査が実施された主な遺跡を中心に概観してみたい。

旧石器から弥生時代については、先述した下の割遺跡・和知町の陣山城跡などで遺物が出土しているが遺構は知られていない。なお、今回の調査で周辺で弥生時代の遺物を表面採集することができた。第2図は、周辺から表面採集した石器である。1は、刃部全体と基部の一部を欠損している



第3図 遺跡群周辺地形図 (1 : 5,000, ●1~5は1~5号遺跡, ★1は石築, ★2は石斧表面採集地点)
が、水利の関係から開墾が行われたのは大正から昭和初期と地元では言われている。この
ことから開墾以前は、古墓や民家などが点在していたようである。

註

文化庁『全国遺跡地図 広島県』昭和57(1982)年では、古瓦採取の大当瓦窯跡付近の遺跡を大鳴遺跡としているが、本書では大当瓦窯跡とした。また、陣山城跡・天城山城跡・岩倉山城跡は立地の上から国広山城跡の一部と考えられるため国広山城跡とした。

III. 調査の概要

福正寺北1号遺跡

本遺跡は、JR芸備線下和知駅の南東約0.4kmにあり、南流する国兼川によって形成された標高約180mの河岸段丘上に位置している。現在、周辺は水田地帯となっている。今回調査を実施した遺跡の中で最も南に位置し、北東約40mには福正寺北2号遺跡がある。調査前には、径10m前後、南側で高さ1.5m前後の高まりであった。調査の結果、高まりは古墳の墳丘ではなく、開墾時などに地山に含まれていた礫を寄せ集めてできたと考えられる。以前には、この高まりの上に祠が存在していたとのことであり、田の神などを祭っていたことが考えられる。

福正寺北2号遺跡

1号遺跡の北東約40mに位置している。調査前には石塔がまとまってみられた。調査の結果、検出した遺構は、基壇1基・掘立柱建物跡（SB1-a・b）・土壙（SK1～5）・柵列1条（SA1）である。基壇は、一辺が4m前後と考えられ、周囲には石組の雨落溝が廻っている。上面には礫群が一部みられることから土台敷の建物が推定され、また、周囲には柵列がみられる。基壇土の下で検出した掘立柱建物跡は、1間四方で1回の建て替えがみられる。性格は、規模などから一般的な住居とは考えにくく堂宇のような建物が想定できよう。遺物は、SA1から近世末頃と考えられる磁器が出土している。なお、SA1は基壇に付属する施設と考えられる。

福正寺北3号遺跡

福正寺北2号遺跡の北約20mに位置している。調査の結果、整地土層上面では土壙1基（SK1）・性格不明遺構1基（SX1）を、地山上面ではピット群を検出した。SK1は、木棺が良好な状況で残存しており、棺内からは少量の人骨が出土している。時期は、出土した遺物から近代及びそれ以降と考えられる。

福正寺北4号遺跡

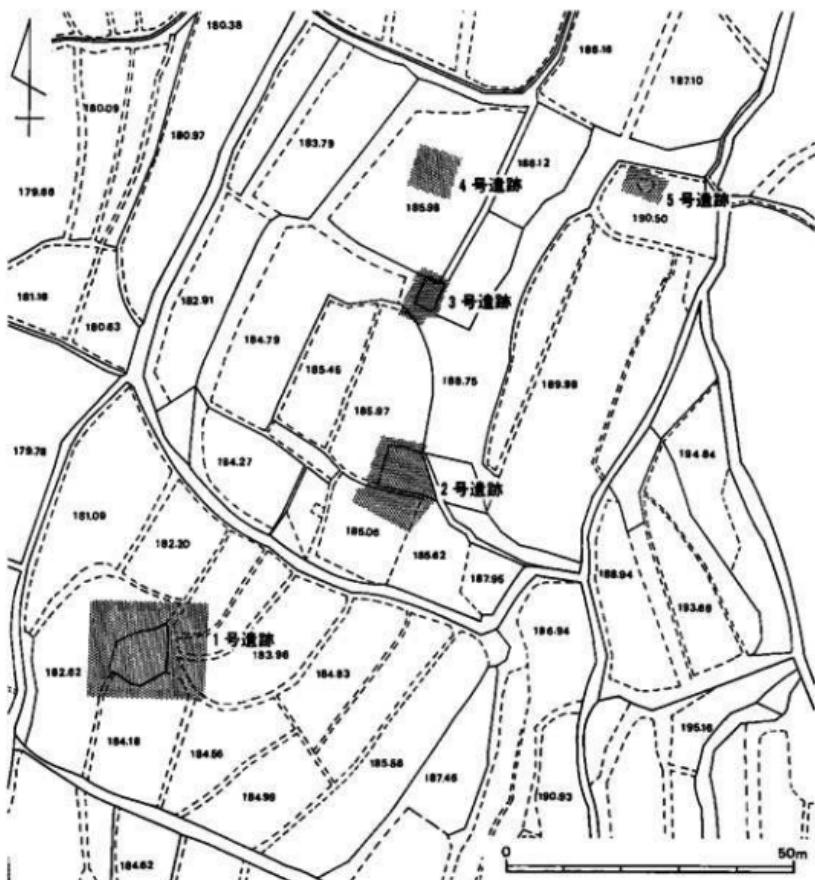
福正寺北3号遺跡の北約20mに位置している。調査の結果、検出した遺構は、土壙4基（SK1～4）・溝状遺構1条（SD1）・性格不明遺構1基（SX1）である。遺物はSK1～3から、棺に用いられたと考えられる鉄釘が出土している。時期は、中世にまで遡ると考えられる遺物がないことなどから近世頃と考えられる。

福正寺北5号遺跡

福正寺北4号遺跡の東約30mに位置している。調査前には、長方形の基壇状の高まりが

存在し、石塔・石材が多数みられた。調査の結果、石塔・石材は開墾時に集積されたことが判明した。

以上のように、福正寺北1号遺跡は古墳ではなく、同2号遺跡の主な遺構は建物跡で、同3号遺跡は近代及びそれ以降の墓壙、同4号遺跡のSK1～4は近世頃の墓壙、同5号遺跡は石塔類を集積した場所であることが判明した。



第4図 遺跡群調査区位置図 (1:1,000)

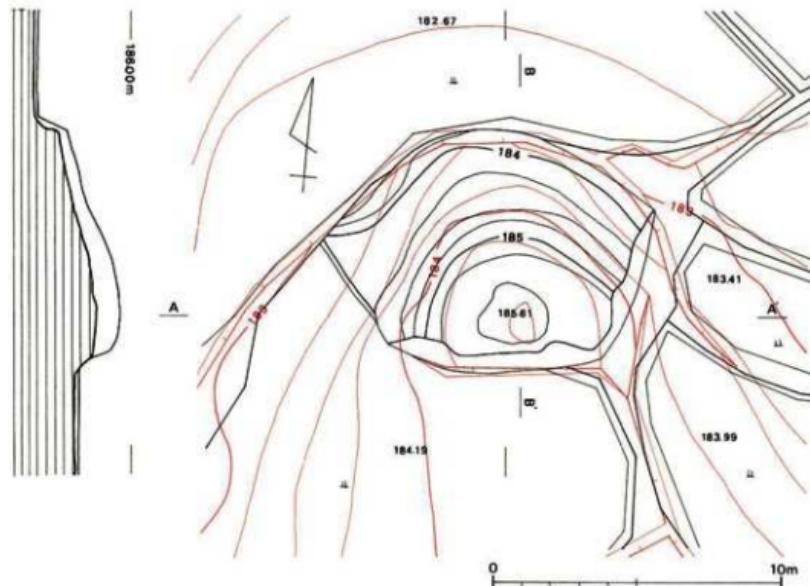
IV. 福正寺北 1号遺跡

1. 遺跡の概要

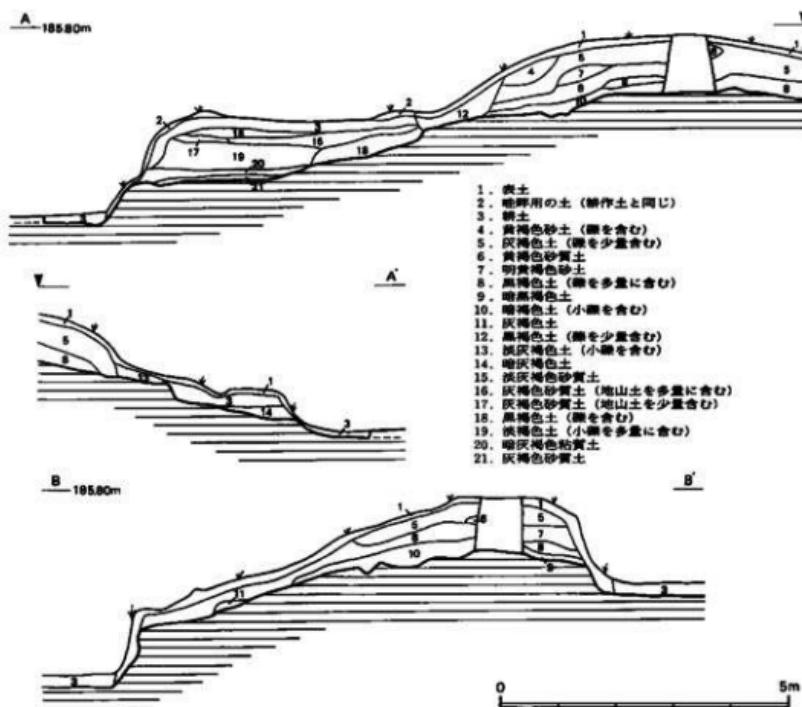
本遺跡は、三次市和知町119番地に所在し、今回調査を実施した遺跡の中で、最も南の水田周辺に位置する。現状は荒地で、周辺の水田の標高は182～184mである。周辺の水田は、西から東側に向かって徐々に高くなっているが、本遺跡の部分で、下段と上段の水田で約2mの違いがあることなどから、本来は、河岸段丘の先端部の付近であったことが考えられる。また、調査の結果、本遺跡の北と南側は谷筋となっていたことが窺え、丘陵状に起伏のある地形であったと考えられる。

調査前は、南側の大半と東側の一部を開墾などによって破壊されたと考えられる推定径10m、南側で高さ1.5mの円墳状の高まりがみられた。北方には、昨年度調査を実施した上大繩古墳が存在することから本遺跡も古墳であると考えられていた。

調査は、墳丘状の高まりの中心部からほぼ東西及び南北に土層観察用の畦を十字形に設定し、周溝の有無、裾部の範囲、埋葬施設などの確認のため掘り下げ作業を進めた。



第5図 地形測量図 (1:200)



第6図 土層断面実測図 (1:100)

2. 遺構と遺物

調査の結果、周辺には周溝などの遺構はみられず、高まりは土層の観察から開墾や耕作時に地山に含まれていた礫などを寄せ集めたものであると考えられる。なお、この高まりの地山面は、南側で約50cm高くなっている。

遺物は、近世以降の陶磁器が高まりや周辺から出土している。また、図示していないが周辺からは弥生土器の小片や石塔（五輪塔）が出土した。

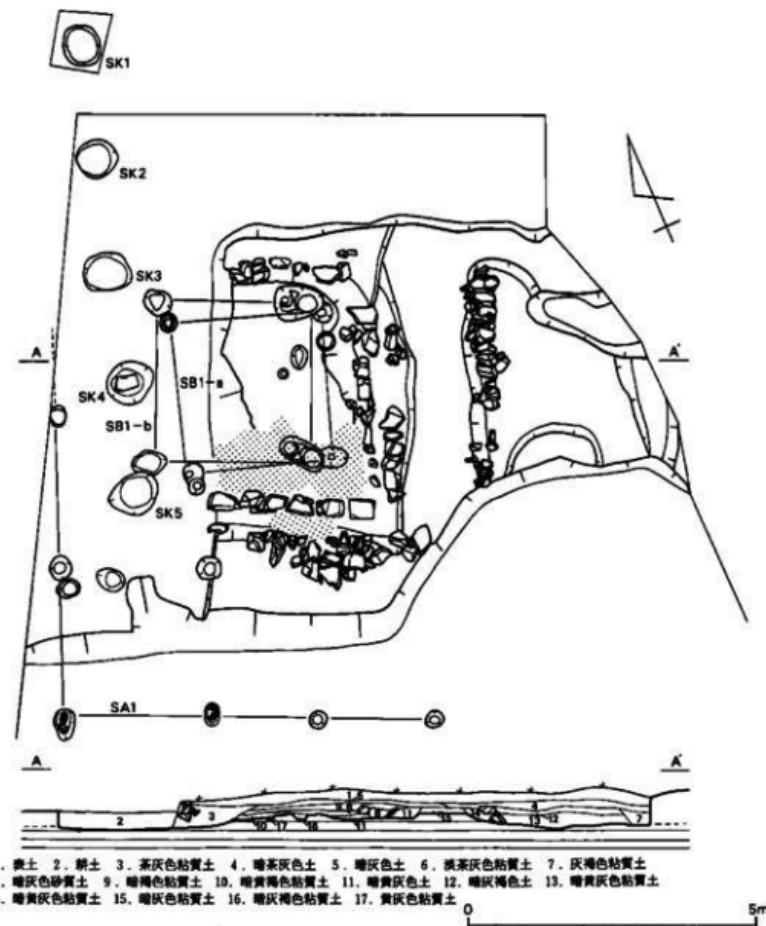
3. 小結

地元の人の話によると、以前にはこの高まりの上に祠が存在していたらしく、田の神などを祭っていたことが考えられる。また、前述したようにこの高まりの部分だけ地山面が高くなっていること、開墾時に礫を集めることによってはこの場所だけ残したとは考えにくいくことなどから、本来この高まりが何らかの祭祀に係わるものであったと考えられよう。

V. 福正寺北 2号遺跡

1. 遺跡の概要

本遺跡は、三次市和知町201-1番地に所在し、周囲は水田で、これより約20cm高い東西約8m・南北約6mの平坦面上に位置する。現状は荒地で、標高は186mである。



第7図 遺構配置図 (1:100, アミ目は石数)

この平坦面上の東側には多量の躰がみられた。特に、南西側では躰の上に五輪塔・宝篋印塔がまとまった状況でみられることから、石積基壇など遺構の存在が考えられた。

調査は、平坦面上の石塔が位置する躰群付近を中心として土層観察用の畦を設定し掘り下げるとともに遺構の検出を行った。

調査の結果、南東側に見られた躰群は堆積状況などから投げ込まれたことが判明し、出土した遺物から考えても石塔の時期と一致しないことから、石積基壇ではなく石塔も本来の位置ではないことが判明した。検出した遺構には、基壇・掘立柱建物跡（S B 1-a・b）・柵列（S A 1）・土壤（SK 1～5）がある。

遺物は、S A 1 から磁器、基壇土内から土師質土器・銅錢（成平元宝・寛永通宝）が、このほかに遺構には伴わないが陶磁器（碗・皿など）・土師質土器（小皿）・石器（石斧）・石塔（五輪塔・宝篋印塔）が出土した。

2. 遺構と遺物

基壇（第8図、図版6）

基壇は、調査区のほぼ中央に位置するが、西側の大半を耕作などにより削平を受けている。このため規模は明確にできないが、東辺の状況からすると一辺が4m前後の正方形であったと考えられる。高さは、第9・10層を基壇土とし約20cmである。南縁辺部の上面には、拳大から20cm大の角躰がみられることから本来は石敷であったことが考えられる。

基壇化粧は、長さ約50cm、幅約30cmのほぼ大きさの揃った自然石を1段広口面を揃えて並べている。特に、南縁は形の整った石を用いて構築している。なお、この石は雨落溝の内側にあたり、基壇と雨落溝の石組を兼用している。

基壇の周囲には、東縁辺部の一部と北縁辺部を耕作などにより破壊されているが石組の雨落溝が残っている。溝の規模は、残存状況が良好な基壇南縁辺部で内法幅が約40cm、深さ約30cmである。東縁辺部は、全体に溝の内側に向かって落ち込んだ状況であるため狭くなっている。外側の石組の石は自然石で、基壇側の石と比較して小型で20～40cmの大きさで、これを1段広口面ないし小口面を揃えて並べている。南側溝底には、一部に拳大の自然石が存在することから、本来は石敷であったことが考えられる。

基壇上面では、礎石などを伴う建物跡は検出できなかった。しかし、基壇南縁辺部には石敷がみられることから土台敷の建物があったことが推定される。建物の規模については明確にできないが、基壇の規模と雨落溝の位置からすると、半間程度の軒が廻る1間四方の小型の建物であったと推定される。

基壇の東縁端から約1.5mのところには、その南側を耕作などにより破壊され、途中切れ

ている部分もあるが、長さ約2.4mの石列がある。この石列は、長さ30cm～40cm、幅20cm前後の自然石を一段小口面を揃え、石相互の隙間などに拳大の石を詰めて補強している。石列は、基壇に対してほぼ並列しており、基壇と何らかの関係を有する施設と考えられる。

遺物は、細片または腐食が著しいため図示していないが、基壇土内から土師質土器片・銅錢（咸平元宝・寛永通宝）が出土している。

掘立柱建物跡

S B 1（第8図、図版7）

S B 1は基壇土の除去後に地山面で検出した掘立柱建物跡である。規模は1間四方で、建替えが行われている。なお、S B 1は、調査区外（西側）にさらに延びていることも考えられたため、確認のための坪振りを実施したが柱穴は検出できなかった。基壇と同様に、西側の柱穴は耕作などにより削平されている。重複関係から、S B 1-aが古く、S B 1-bが新しい。

S B 1-a

柱穴の規模は、径約30cm、深さ約60cmで、平面形はほぼ円形である。柱間は2.4m(8尺)～2.7m(9尺)でばらつきがみられる。北西隅の柱穴内からは、長さ・幅ともに20cm、厚さ5cmの扁平な自然石が底面より約10cm上方で出土している。遺物は出土していない。

S B 1-b

柱穴の規模は、径40cm～50cm、深さ約50cmで、平面形は不整な円形である。柱間は約2.7m(9尺)の等間である。遺物は出土していない。

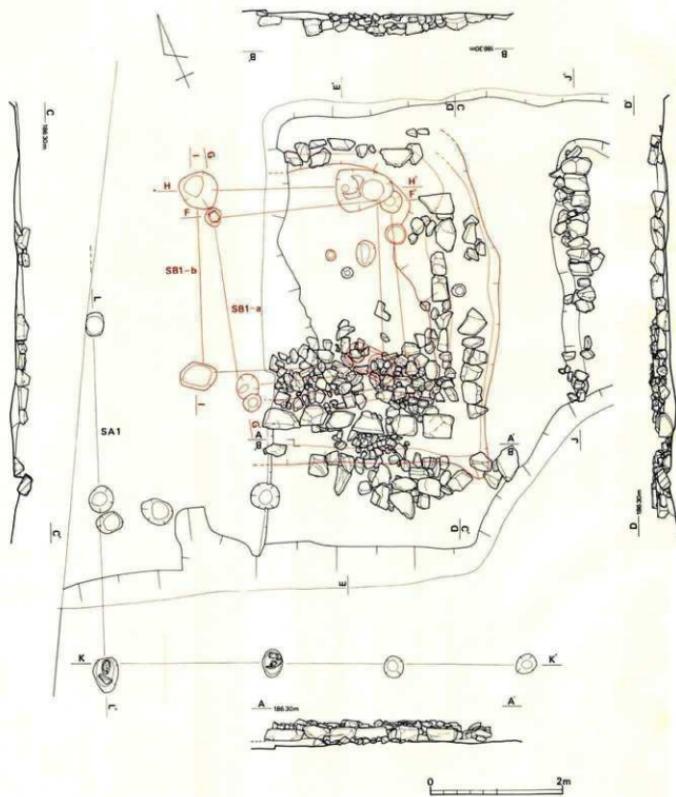
柵列

S A 1（第8図、図版7）

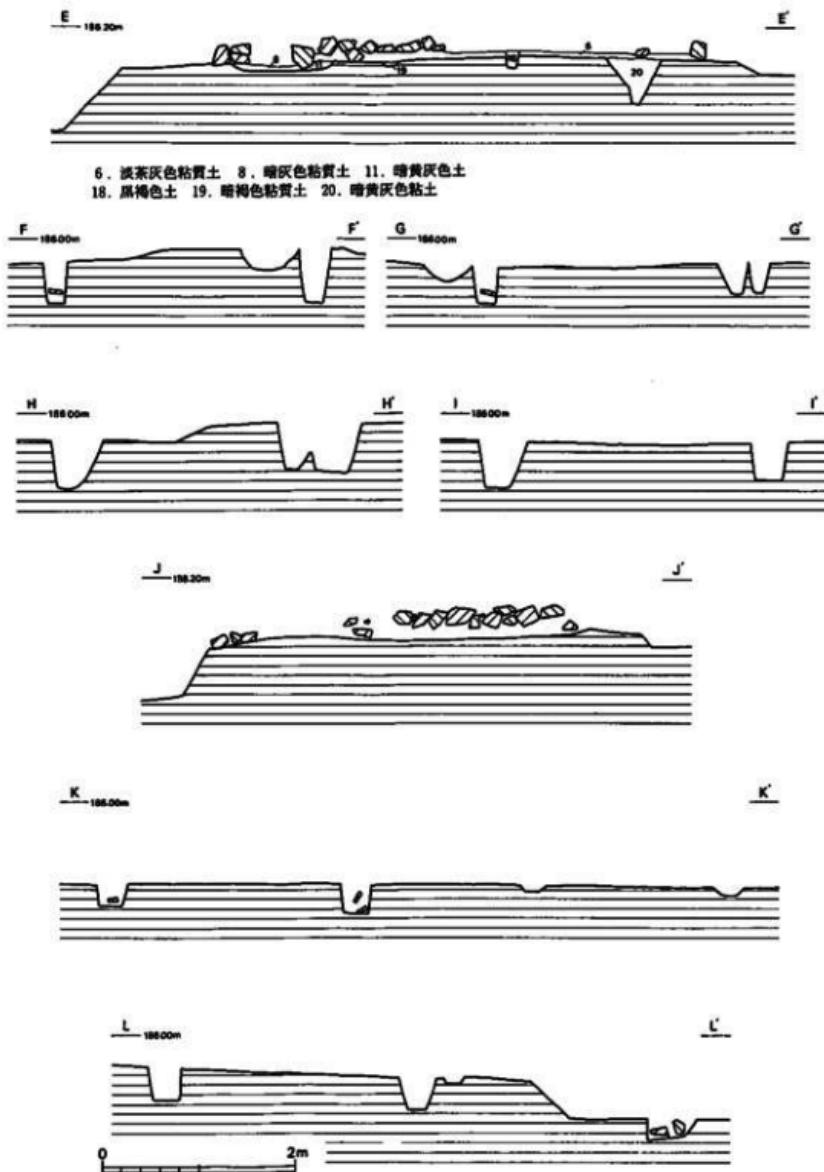
S A 1は、調査区の南・西端で「L」字状に、基壇に並行する状態で東西3間、南北2間分を検出した柵列である。西側の柵列は、調査区外のため明確にはできないがさらに北へ延びると考えられる。なお、南側の柵列は、開墾などにより大半を削平されている。

柱穴の規模は、径30cm～50cm、深さは残存状況が良好な西側で約30cmで、平面形は円形ないし橢円形である。柱間は1.8～2.5mとばらつきが大きい。特に、隅とその東側の柱間は2.5mと広く、ほかの柱穴と比べて掘方の規模が大型である。また、柱穴の底面には長さ20cm前後の自然石を用いた根石を据えている。なお、この2個の柱穴のほぼ底面には、柱根が一部残存しており、柱の径は20cm前後であったと考えられる。

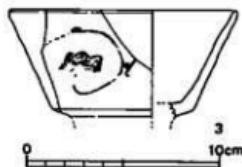
柵列の規模については明確に出来ないが、基壇の東側にはみられないことから全周はしていなかったと考えられる。東西柵は基壇南辺から約3.3m(10尺)離れ、ほぼ並行してい



第8図 基壇・SB1・SA1実測図 (1:60)



第9圖 基壇・SB1・SA1断面図 (1:60)



第10図 SA 1出土磁器実測図
(1 : 3)

ることからこの基壇に付属する施設と考えられる。

遺物は、柱根のほかに隅にあたる柱穴から磁器片が出土した。

出土遺物

磁器（第10図、図版11）

3は、染付の磁器碗の口縁部から底部片で、推定口径は11.6cmである。体部から口縁部は斜め上方に直線的に立ち上がる。体部と底部の境には明瞭な稜がみられる。体部外面には呉須によるつる状の文様がある。胎土は白色である。肥前系の磁器と考えられる。

土壤

調査区の西側で、南北方向に直線的にはば等間隔に並んだ状況で5基（SK 1～5）を検出した。上面は、耕作などにより削平を受けている。

SK 1（第11図、図版9）

調査区の北西に位置し南へ約1.3mにはSK 2がある。

掘方の規模は、長径約0.7m、短径約0.6m、深さ約0.68mで、平面形は橢円形状である。底面は中央に向かってやや傾斜している。遺物は出土していない。

SK 2（第11図、図版9）

調査区の北西隅に位置し、南へ約1.3mにはSK 3がある。

掘方の規模は、径約0.7m、深さ0.72mで、平面形はやや不整な円形である。遺物は出土していない。

SK 3（第11図、図版10）

SK 2の南約1.3mに位置し、南へ約1.3mにはSK 4がある。

掘方の規模は、長径約0.8m、短径約0.62m、深さ約0.6mで、平面形は橢円形状である。底面は中央に向かってやや傾斜している。遺物は出土していない。

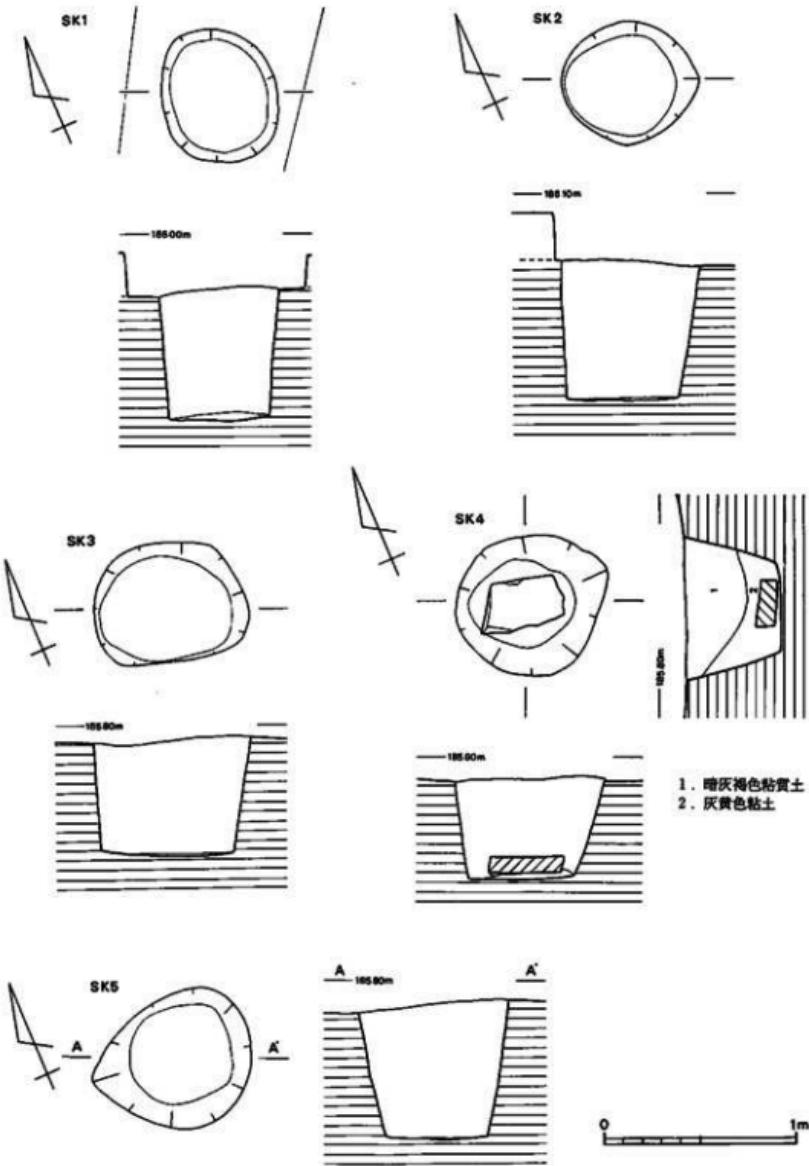
SK 4（第11図、図版10）

SK 3の南約1.3mに位置し、SK 4の南へ約1.2mにはSK 5がある。

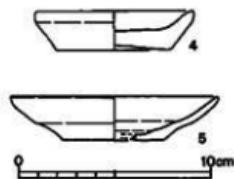
掘方の規模は、径約0.7m、深さ約0.52mで平面形はやや不整な円形である。底面は、中央に向かってやや傾斜している。底面のほぼ中央には、長さ約40cm、幅約25cm、厚さ約10cmの扁平な自然石がある。この自然石以外に遺物は出土していない。

SK 5（第11図、図版9）

最も南に位置し、北へ約1.2mにはSK 4がある。掘方の規模は、径約0.7m、深さ0.7m



第11圖 SK 1~5 斷面圖 (1:30)



第12図 調査区出土の土器実測図
(1 : 3)

で、平面形は西側がやや張り出す不整な円形である。底面はほぼ水平である。遺物は出土していない。

3. 調査区出土の遺物
土器 (第12図、図版11)

4・5は土師質土器の小皿で、4は推定口径8cm、高さ2cm、底径5.8cmである。体部から口縁部は斜め上方に直線的に立ち上がる。器壁は全体的に厚い。口縁から体部は内外面ともに横ナデ、底部内面は不定方向のナデを施している。底部内面はやや凹み、不明瞭であるが糸切りと考えられる痕跡がみられる。胎土には1mm以下の砂粒を少量含む。5は推定口径10.7cm、高さ2.3cm、底径5.2cmである。体部から口縁部はやや内傾し斜め上方に立ち上がる。器壁は薄い。調整は内外面ともに摩滅のため不明である。胎土には1mm程度の砂粒を多く含む。色調は4が黄褐色、5が明黄褐色である。

石塔 (第13図、図版11)

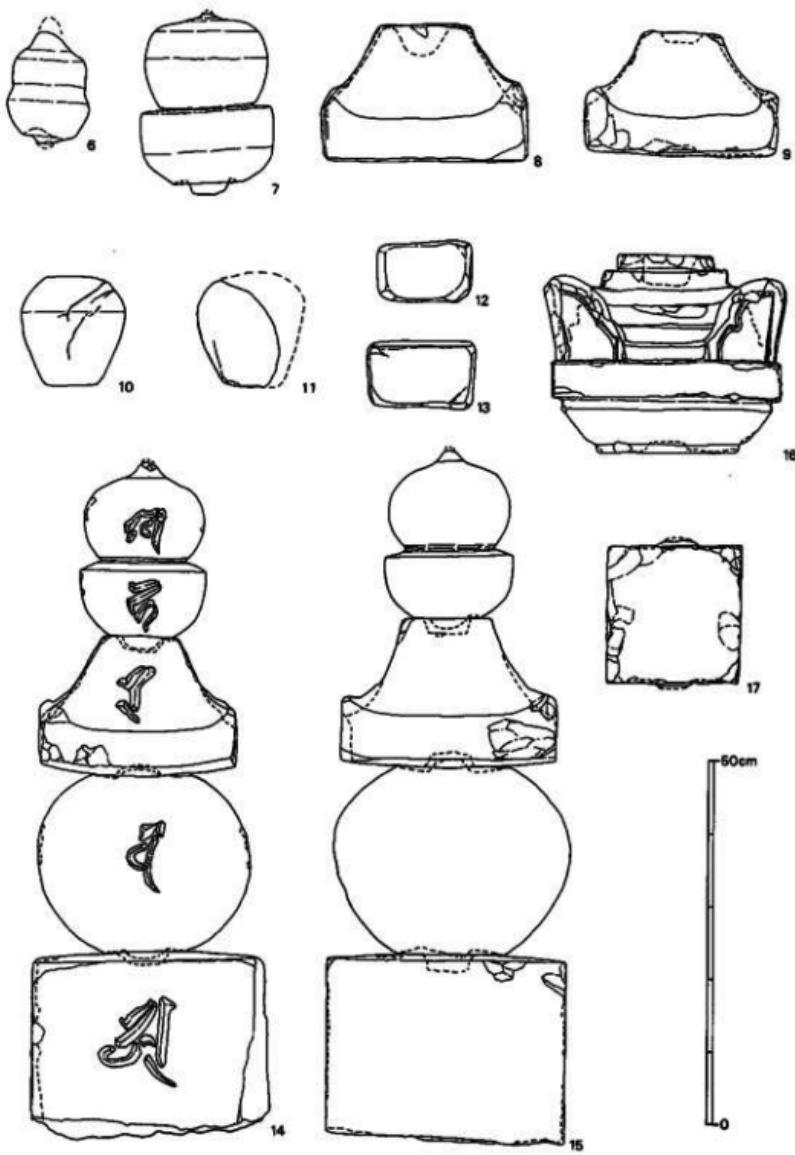
五輪塔

6～13は残欠、14・15については検出時完存していたが一部入れ替わっていたものを組みなおしたものである。

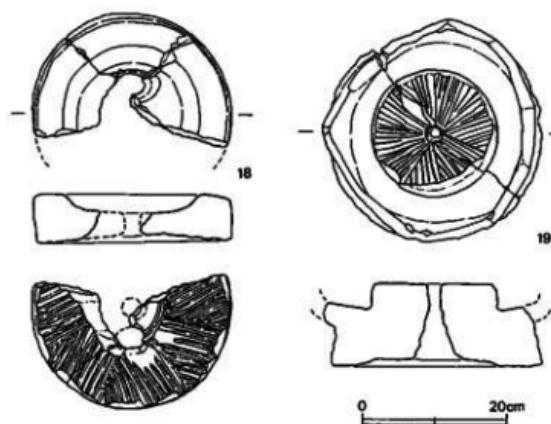
6・7は空風輪である。小型で扁平気味、空輪の先頂部が大きく突出する6と、大型で形の整った7がある。8・9は火輪である。8は軒の厚さが中央部で4.8cm、両端は欠損するが8cm前後と考えられる。上面には円形の枘穴がある。9は軒の厚さが中央部で5.5cm、両端は欠損するが10cm前後と考えられる。上・下面には円形の枘穴がある。10・11は小型で壺形の水輪である。12・13は小型の地輪である。平面形はほぼ正方形である。14・15は空輪の先頂部・火輪の軒先を一部欠損している。14は高さ現存で91cmで、各輪の4面には種子が陰刻されている。15は高さ現存で94cmである。風化はほとんどみられない。高さから3尺塔と考えられる。石質は6・10・11・12・13が結晶質石灰岩で、8・9・14が花崗岩、15が花崗斑岩である。結晶質石灰岩のものについては風化が多くみれる。

宝篋印塔

16は高さ27.4cmの笠である。下2段、上6段の定型であるが、上段と下段を合わせるのは直線ではなく弧状となっている。觸飾は、2弧の輪郭付きで外反気味に斜め上方に立ち上がる。風化はあまりみられない。上・下面には円形の枘穴がある。17は塔身で、高さは軒を除き約18.9cm、幅約18.5cmである。上・下面には円形の枘がある。石質は16・17とも



第13図 調査区出土の石塔実測図 (1:8, 6~15は五輪塔, 16・17は宝蓋印塔)



第14図 調査区出土の石製品実測図 (1 : 8)

に花崗岩である。

石製品

石臼(第14図、図版11)

18は約半分を欠損するが石臼の上臼で、径約27.7cm、高さ約6.9cmである。主・副溝ともに摩滅が著しい。

19は茶白の下臼で現存径約29.3cm、高さ約11.3cmである。底面は部分的に焼けている。

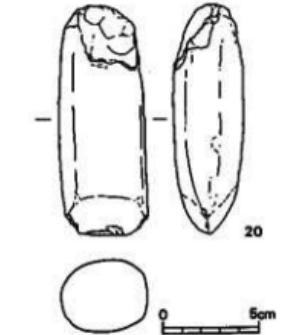
石質は18が花崗岩で、19が砂岩である。

石器(第15図、図版11)

20は、遺構の時期を示すものではないが雨落溝の南東隅付近で、補強用として用いられていた小型の始刃石斧である。基部の一部を欠損しているが、残存長11.8cm、幅4.5cm、重さ346gである。刃部以外は風化がみられる。石質については、明確にできないが石英閃緑岩と推定される。

4. 小結

調査の結果、基壇1基・掘立柱建物跡1棟(SB1-a・b)・柵列1条(SA1)・土塙5基(SK1~5)を検出することができた。



第15図 調査区出土の石器実測図 (1 : 3)

基壇の規模・状況については、その西半部が削平されているため明確にはできないが、基壇東半部の規模や石組の状況から考えると、一辺が4m前後の正方形であったことが推定される。基壇上の建物については、柱穴・礎石などはみられないが、基壇の南縁辺部に石敷がみられることから、土台敷の建物の存在が推定できる。建物の規模については基壇の規模・石組の雨落溝の範囲からすると、1間四方程度の小型の建物であったといえよう。なお、南縁辺部でみられた石敷は、基壇端から約1m内側まで存在しているが、他の部分

は現状では検出できなかった。しかし、この石敷が四方に存在していたとすると、少なくとも建物は石敷が終わる付近に位置していたと考えられる。また、石敷が南縁辺部にのみ存在していたことや、南縁辺部の基壇・石組の雨落溝が現存する部分では丁寧に構築されていることからすると建物は南面していた可能性がある。建物の性格については、先述したように1間四方と小型であったとすると、一般的な住居とは考え難いことから、社殿のほかに社堂・觀音堂・地蔵堂と呼ばれている小堂宇が考えられる。本遺跡の出土遺物の中には、石塔類がみられることからすると社堂などの小堂宇であった可能性が考えられる。なお、SB1-a・bは基壇の下で検出した掘立柱建物跡であるが、1間四方の建物であることから、この基壇をもつ建物の前身的なものであった可能性が強い。

SA1からは、近世末頃の肥前系の碗とみられるものが出土しており、SA1の時期はこの頃と推定される。SA1と基壇・SB1との関係は明確にできないが、SA1がSB1に伴うと考えると基壇は近代にまで下る可能性があることになるが、基壇土内から土師質土器、寛永通宝などが出土していること、地元では基壇に伴う建物についての伝承がないことからみて、時期は近世と考えられる。SB1は掘立柱建物であるが、このような建物が先述したように小堂宇であるとしても、近世末まで存続しているとは考え難い、SA1はSB1に伴うのではなく、基壇に伴っていた時期があると考えられよう。従って、基壇上の建物については何回かの建替えが行われたことが考えられ、SA1が破棄された頃に基壇に伴う建物も破棄された可能性もある。SB1の時期は先述したように、基壇を伴う建物の前身的なものとすると、付近に中世～近世初頭頃と考えられる石塔類がみられることから、この時期まで遡る可能性がある。

調査区西側の柵列とSB1・基壇との間で検出した土壙群は、平面形が梢円形または円形で、南北方向にほぼ等間隔に並んでいるが、いずれの土壙からも遺物が出土していないため時期は不明である。土壙上面は削平を受けており、本来は現状よりも若干大きく、深さも若干深いと考えられる。また、壙底はほぼ平坦で、壁は垂直気味に立上っている。このような規模・形状のほか、付近に石塔類が存在することから、先述のように基壇に伴う建物やSB1が小堂宇であったと可能性を考慮すると、これらの土壙は墓壙であった可能性が高い。また、土壙がほぼ等間隔に存在していることは、地上の標識によりこれらの場所が知られていたことを窺わせる。この種の標識としては自然石による立石・石塔・板塔婆などが考えられよう。なお、SK5とSB1-bの南西角にあたる柱穴は接しているが、土層による新旧関係は確認できなかった。しかし、SK3～5とSB1・基壇とは近接しており、その成立に時間的な隔りがあることが知られる。

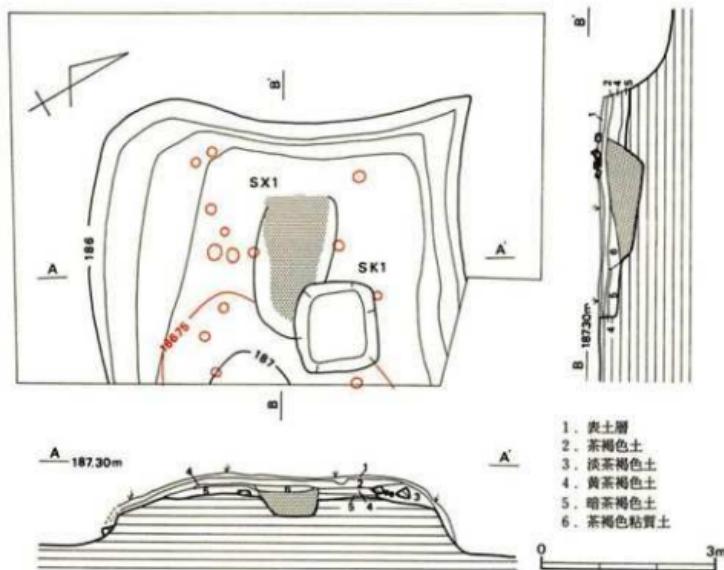
VI. 福正寺北3号遺跡

1. 遺跡の概要

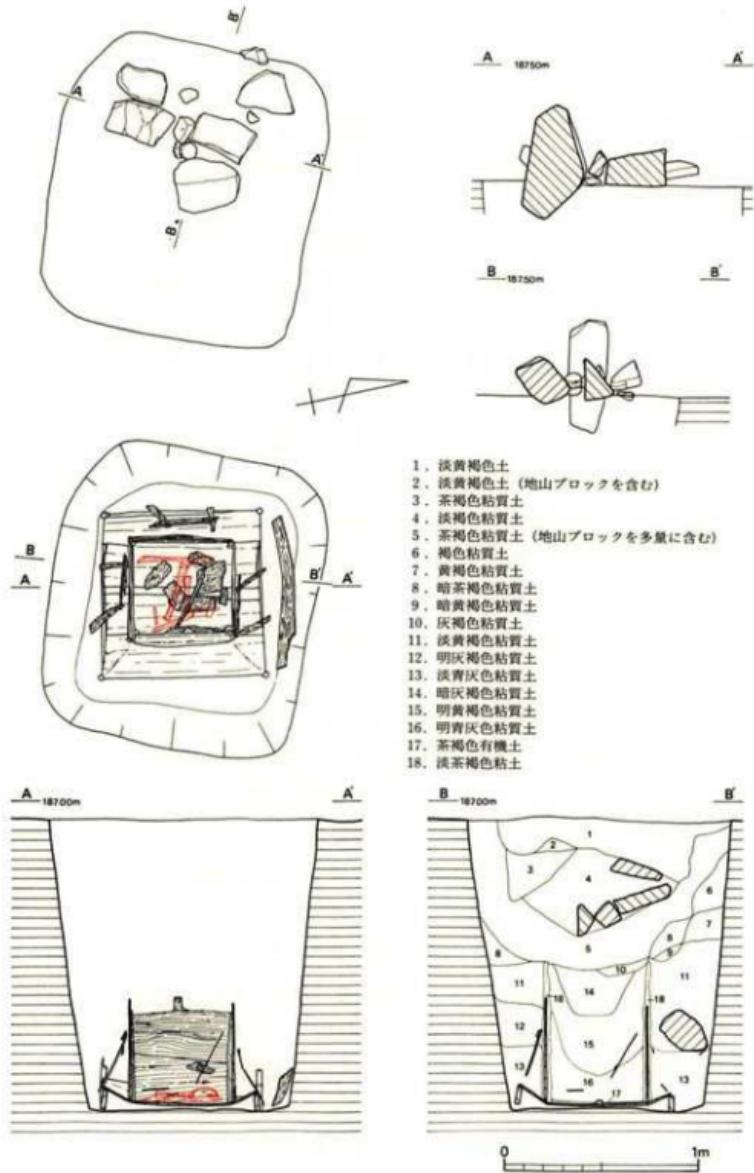
福正寺北3号遺跡は、三次市和知町204-1番地に所在する。遺跡がある周辺の現水田面の標高は約186mで、周囲の水田面より約1m高い、長さ約10m、幅3~5mの平坦面上に位置している。調査前には、墓標石と考えられる自然石の群が多数みられた。調査は、平坦面の先端部分を中心に実施し、土層観察用の畦を設定して掘り下げるとともに、周辺の水田の耕作土を除去し遺構の検出を行った。遺構は、整地土（茶褐色土）層上面、地山（暗赤褐色粘質土）上面で確認した。

調査の結果、整地土層上面で土壤1基（SK1）・性格不明遺構1基（SX1）を検出した。遺物は、SK1から瓦片、このほかに遺構に伴わないが陶器・磁器・鉄錢・石塔（宝篋印塔）が少量出土している。

地山面では、径15~20cm、深さ10~20cmのピット群を検出した。ピット群の性格については、遺物など出土していないため明確にできない。



第16図 遺構配置図 (1:100, アミ目は裸群)



第17図 SK1 実測図 (1:30, 赤色は人骨)

2. 造構と遺物

土壤

SK 1 (第17図、図版14・15)

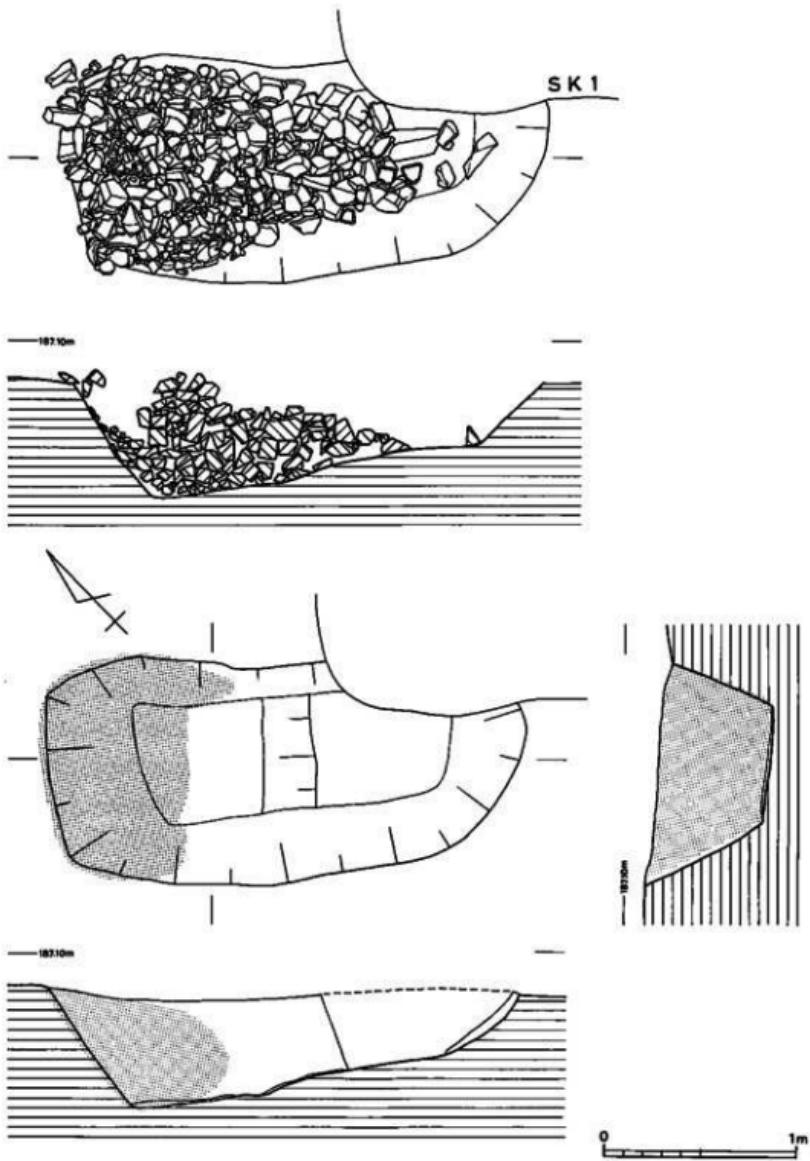
SK 1は調査区の東端に位置し、SX 1と重複しておりSK 1が新しい。掘方の上面で自然石を用いた墓標石を検出した。墓標石は掘方の南西隅に位置し、長さ約60cm、幅20cmの石を立て、現状では一部乱れている部分もあるが、周辺には長さ約30cm前後の石を敷いていたことが窺える。石の間には10cm前後の角礫がみられ、これらの礫に混じって宝篋印塔の相輪（九輪及び請花）の破片が出土した。なお、第4層のほぼ中央部からは埋葬時に墓の位置を示す標石と考えられる長さ10～30cmの礫が集中してみられた。

掘方の規模は、長さ1.52m、幅1.38m、深さ1.5mで、平面形は隅丸長方形である。長軸方位はN70°Wである。

底面には、掘方の長軸方位よりやや西側寄りに「神興館」と呼ばれる座棺が良好な状況で残存していた。台座は、土圧により一部破損しているが、長さ約80cm、高さ約10cm、厚さ約4cmの板を用いて、ほぼ正方形の枠組を作り、この上に枠組と同じ長さで、幅20cm前後、厚さ約2cmの板を4枚使用し鉄釘で接合している。枠組の東・西辺には、担ぎ棒を貰くためそれぞれ2か所に長方形の穴を穿っている。また、各辺の隅には、長さ10数cm、径約4cmの竹筒を台座に対してほぼ垂直に取り付けている。なお、この「神興館」に付属する屋根・担ぎ棒はみられない。

台座の中央に位置する座棺は、一辺が約50cmで、平面形は正方形である。棺の台座への取付方法は、棺の四隅にあたる部分に枘穴を穿ち、現存で長さ50cm前後、幅4cm前後の角材を台座に垂直にはめ込んでいる。このため棺自体の底板ではなく、台座の板が底板となっている。角材の外側には、厚さ1cm前後の板を現存で2～3枚横に用い釘で接合を行っている。棺の高さは現存で50cm前後であるが、土層観察から本来は70cm前後であったと考えられる。なお、棺の下部の外側には、補強用と考えられる幅約10cm、厚さ約1cmの板を周囲に廻らせ、四隅の板の小口部分には、装飾のために竹を半截したものを釘で接合している。台座の東側を除く三方には、厚さ約5mmの板を組み合わせた鳥居が取り付けられている。棺内からは、蓋などの棺材が落ち込んだ状況で出土した。また、底面からは、年令・性別などは不明であるが人骨の一部が出土している。北辺からは、底面から壁に添うようにして長さ約80cm、幅10cm前後、厚さ1cmの用途不明の板材が出土している。

遺物は、人骨のほかに図示していないが、第4層の礫群の最下部より近代及びそれ以降と考えられる油瓦片が出土している。



第18図 SX 1実測図 (1:30, アミ目は熱変範囲)

性格不明遺構

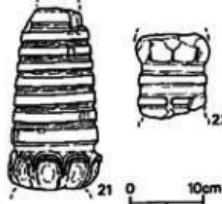
S X 1 (第18図、図版16)

S X 1 は、平坦部のほぼ中央に位置するが、S K 1 により北東隅を破壊されている。検出時、掘方の西側上面で墓標石と考えられる礫群が存在していた。しかし土層観察の結果、礫群は S X 1 に伴わないことが判明した。なお、礫群中から宝篋印塔の相輪（請花及び九輪）部分が 1 点出土している。

掘方の規模は、長さ 2.5m、幅 1.16m、深さ 30~60cm で、平面形は東小口が張りだす隅丸長方形である。底面は、東小口側から西小口側に向かって大きく傾斜している。特に底面の中央には高さ約 10cm、幅約 20cm の段がある。掘方内には、熱を受け橙褐色ないし赤褐色に変色した数 cm~30cm 大の角礫が多量にみられる。角礫の堆積状況は、西小口側が厚く、東小口側に向かって薄く、底面付近には小型なものがみられる。西小口及び付近の壁面・底面は、礫と同様に熱により赤褐色に変色し固く締まっている。また、底面の中央にある段より西側では、炭化物が認められた。

3. 調査区出土の遺物

石塔 (第19図、図版21)



第19図 調査区出土の石塔
実測図 (1 : 8)

21・22 は宝篋印塔の相輪片である。21 は S X 1 の上面の礫群中から出土したもので、伏鉢と九輪の第八輪以上を欠損している。請花は単弁である。各輪は丁寧に彫出している。22 は S K 1 の墓標石中から出土したもので、上段の請花の一部と、九輪の第八・九輪片である。請花は単弁である。各輪は丁寧に彫出している。石質は 21・22 とともに花崗岩で、風化はあまりみられない。

鉄鏡 (第20図、図版21)

23 は寛永通宝であるが、銹化が著しいため「永」は判読できない。

4. 小結

調査の結果、整地土層上面で S K 1・S X 1 を、地山上面でピット群を検出することができた。

S K 1 の時期については、伴う遺物がほとんどないため明確にできないが、昭和初期頃と考えられる油瓦が、第 4 層にみられた礫群の最下部から出土している。また、地元の人の



第20図 調査区出土の鉄鏡
拓影 (1 : 1)

話によるとこの地域は昭和30年ごろまで土葬を行っていたとのことである。のことから、概ね昭和初期及びそれ以降に位置づけられよう。

「神輿棺」については、その出土例は本県においては初例であるが、この地域の墓制を考える上で考古学的にも、また、民俗学的にも貴重な資料といえよう。

S X 1 の時期については出土遺物がないため不明であるが、S K 1 との重複関係からみて少なくとも S K 1 よりは古い。

S K 1 の性格については、掘方の壁面・底面が熱を受け変色し固く縮まっていることや、同じく熱により変色した礫が多数みられる。この地域では、麻の繊維を探る工程の中で、礫を火で熱しこの礫に水をかけ水蒸気を発生させることにより、麻を蒸す「おがま」と呼ばれる施設が存在していたことが知られている。S X 1 は、「おがま」と呼ばれる施設の構造などと類似していることから同様の性格の遺構と推定されよう。

整地土を除去し地山上面で検出したピット群については、時期・性格ともに明確にできないが、検出面が異なることから S X 1 などに伴うものではない。調査区外には基標石と考えられる石が多数みられ、形成され始めた時期は不明であるがこの高まりが墓地であったことは確実である。また、整地土からの出土遺物もなくどの時期に整地が行われたのか不明である。この整地土の広がりについては調査区外に延びるため明確にできないが、地形などから考えると整地は高さが低い高まりの先端部分を主に行っていると考えられる。これらのことから、ピット群は整地以前のものであるが性格は不明であるといえよう。

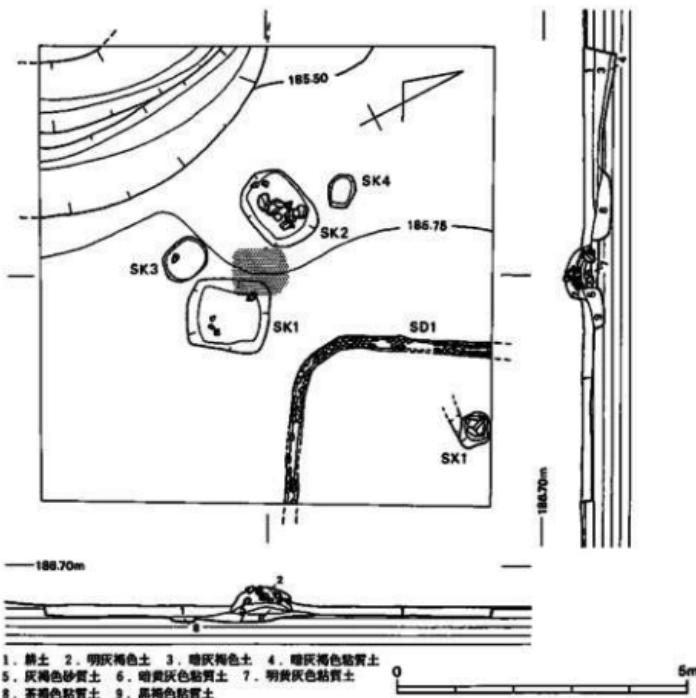
VII. 福正寺北4号遺跡

1. 遺跡の概要

福正寺北4号遺跡は、三次市和知町216番地に所在し、調査前には、一辺が1m前後、高さ約30cmの高まりが水田の中に存在していた。標高は186mである。調査は、この高まりを中心とし、調査区を設定し、土層観察用畦を残して掘り下げ遺構検出を実施した。遺構検出面は、黄褐色粘質土層（地山）上面である。

検出した主な遺構は、高まりの周辺で土壤4基（SK1～4）、溝状遺構1条（SD1）、性格不明遺構1基（SX1）である。このほかに調査区の南西隅で暗渠と考えられる疊が多数入った溝を検出した。

遺物は、SK1～3から棺に使用したと考えられる鉄釘が出土している。



第21図 遺構配置図 (1:100, アミ目は高まり)

2. 造構と遺物

土壤

高まりの周辺から 4 基を検出したが、開墾などに伴う削平により残存状況はよくない。

SK 1 (第22図、図版18)

SK 1 は、調査区の中央にある高まりの南東隅に位置し、西に隣接して SK 3 がある。長軸方向は N30°E である。

掘方の規模は、長さ 1.49m、幅 1.21m、深さ 30cm で、平面形は隅丸長方形である。底面はほぼ水平である。掘方の北西隅・南東隅付近からは、底面より浮いた状況で 10cm 前後の角礫が 4 個出土している。

遺物は、掘方の東壁付近を中心として底面より 10~20cm 浮いた状況で、木棺の緊結に用いられたと考えられる鉄釘片が出土している。

出土遺物

鉄器 (第23図、図版21)

24~27 は角釘である。24 は釘頭~胴部片、25~27 は胴部片である。断面は正方形ないし長方形である。25 以外は木質が一部残存している。

SK 2 (第22図、図版19)

SK 2 は、SK 1 の北西約 1m に位置し、北側に隣接して SK 4 がある。長軸方向は N76°E である。

掘方の規模は、長さ 1.39m、幅 1.05m、深さ 31cm で、平面形はやや不整な隅丸長方形である。底面はほぼ水平である。検出時に掘方のほぼ中央で木棺痕跡を確認できた。これによると木棺の規模は、長さ 95cm 前後、幅 55cm 前後、深さ 30cm 以上であることが判明した。

また、木棺痕跡の内側の底面上には、墓標石と考えられる 10~40cm 大の礫が多量に落ち込んだ状況で出土している。

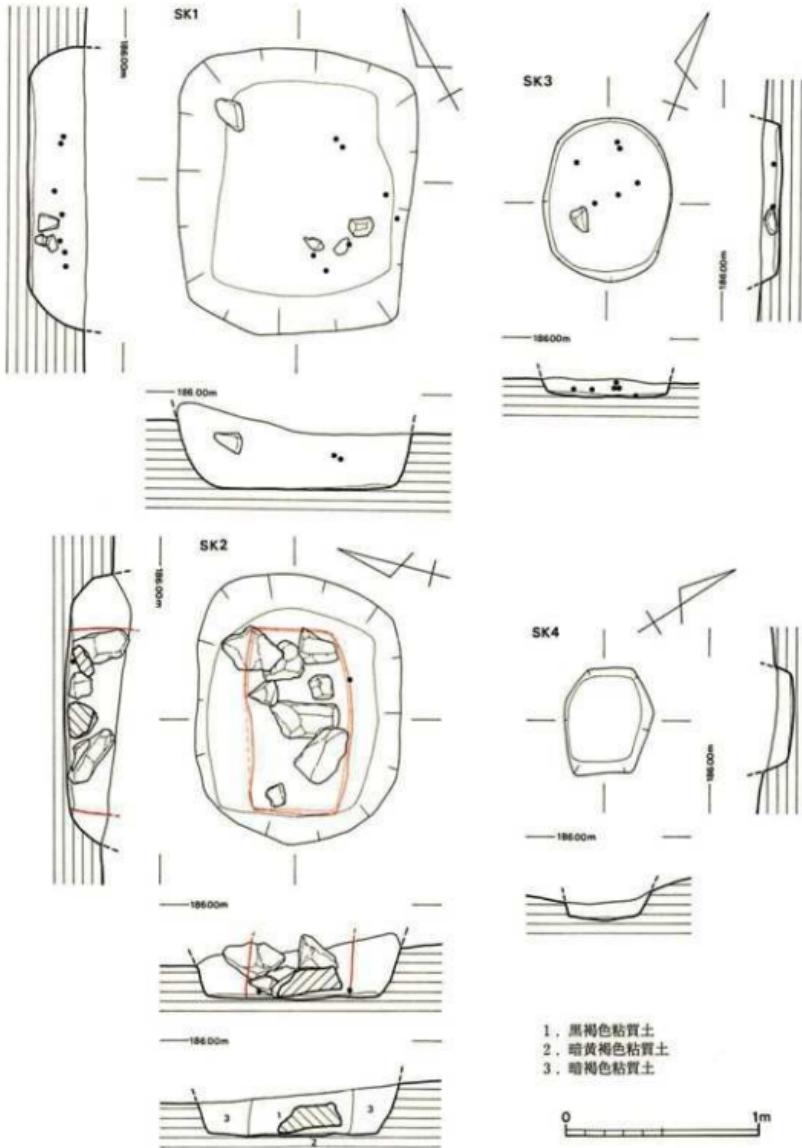
人骨は出土していないが、棺自体の長さに対して幅が広いことなどから、側臥屈葬された成人用の墓壙と考えられる。頭位は不明である。

遺物は、木棺の緊結に用いられたと考えられる鉄釘片が、木棺痕跡の内側の底面付近から出土している。

出土遺物

鉄器 (第23図、図版21)

28~30 は角釘である。28 は釘頭~胴部片、29~30 は胴部片である。断面は正方形ないし長方形である。いずれも木質が一部残存する。長さは 28 の角釘から約 4cm と考えられる。



第22図 SK 1～4 の実測図 (1 : 30, • は釘, 赤線は木棺痕跡)

SK 3 (第22図、図版20)

SK 3は、SK 1の西に隣接して位置する。長軸方向はN20°Wである。

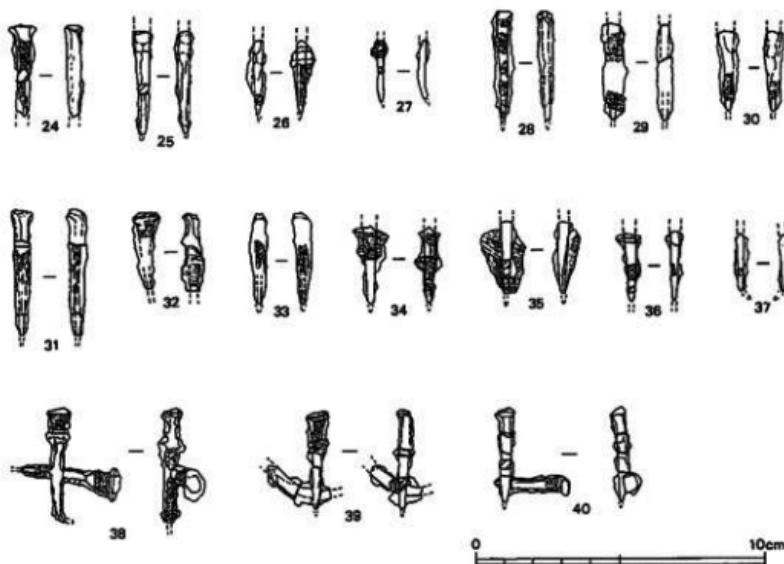
掘方の規模は、長さ85cm、幅67cm、深さ10cmで、平面形は両小口側がやや張る隅丸長方形である。底面には、やや凹凸がみられる。掘方の南西隅付近からは、10cm前後の角礫が底面よりやや浮いた状況で1個出土している。掘方の規模などから、小児用の埋葬施設と考えられる。

遺物は、木棺の緊結に用いられたと考えられる鉄釘片が出土している。

出土遺物

鉄器 (第23図、図版21)

31~40は角釘である。31・32は釘頭から胴部片である。33~37は胴部片である。38~40は主として釘頭から胴部片で、各々2本の釘がほぼ直交している。断面は、正方形ないし長方形である。37以外は木質が一部残存している。長さは38~40からみて4cm前後と考えられる。



第23図 SK 1~3 出土鉄器実測図 (1:2, 24~27はSK 1, 28~30はSK 2, 31~40はSK 3)

S K 4 (第22図, 図版19)

S K 4 は、S K 2 の北に隣接して位置する。長軸方向は N58°W である。

掘方の規模は、長さ 54cm、幅 46cm、深さ 15cm で、平面形は胸部がやや張る長方形である。底面は、西小口側に向かってやや傾斜している。鉄釘などは出土していないが S K 2 との位置関係などから小児用の墓壙と考えられよう。遺物は出土していない。

溝状造構

S D 1 (第24図, 図版20)

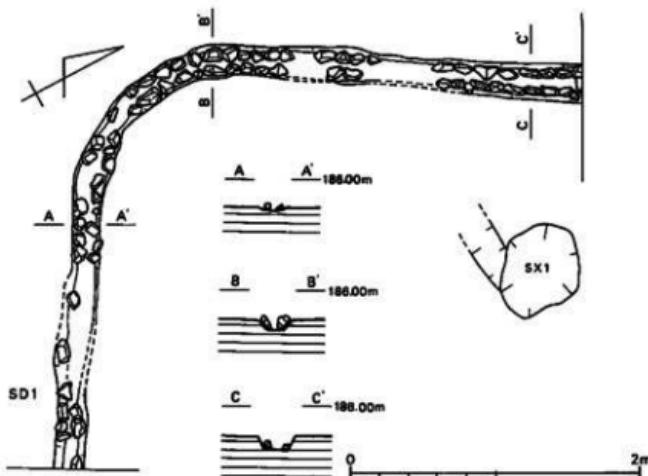
S D 1 は、調査区の東部に位置している。検出したのはコーナー部分と考えられるが、その大半は調査区外に延びている。規模は、幅 20cm~25cm、深さ 5cm~10cm で、断面の形は逆台形である。底面は、南側から北側に向かって徐々に傾斜している。溝の底面には、耕作に伴う削平などにより不明な部分もあるが、10cm 前後の角礫を両壁面側に沿って立て並べている。遺物は出土していない。

性格不明造構

S X 1 (第25図, 図版21)

S X 1 は、調査区の東隅附近に位置する。

掘方は、段状に掘り込まれており、断面の形状は下方が箱型となっている。上段の規模



第24図 SD 1 実測図 (1 : 40)

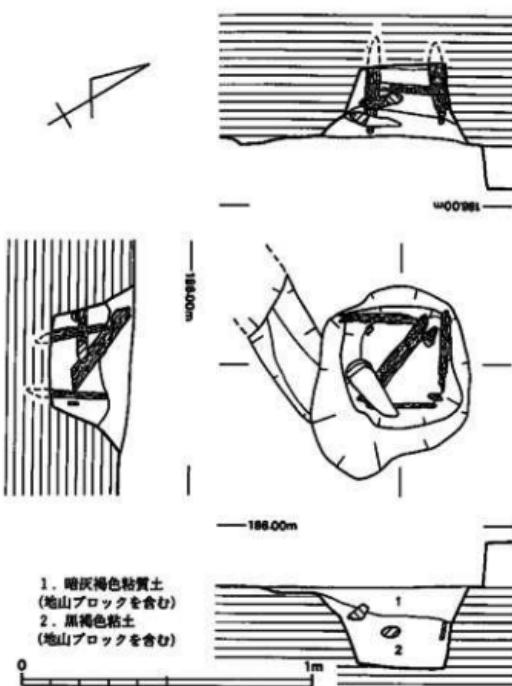
は、南東隅が張りだす一辺が60cm前後の不整な正方形で、深さ10cm前後で斜めに掘り込んでいる。下段の規模は、一辺が40cm前後の平面形が隅丸方形で深さ13cm～20cmである。底面は北東側に向かって傾斜している。底面の四隅には長さ30cm前後、幅3～10cm、厚さ数cmの板状の杭を打ち込んでいる。南壁を除く杭の外側は、1段であるが底面から浮いた状況で長さ30cm前後、幅10cm前後、厚さ数cmの板材で囲んでいる。なお、掘方の南側では土層の状況などから、SX 1に伴うと考えられる西に向かって延びる幅33cm、深さ数cmの溝状遺構を約

30cmまで確認した。その大半を耕作などにより破壊されているが、この溝状遺構はSD 1から西外方に延びないこと、SD 1の底面とほぼ同じ深さで、同じような覆土であることなどからSD 1と何らかの関係を持っていたことが考えられる。遺物は出土していない。

3. 小結

今回の調査で、土壙4基(SK 1～4)のほかに、溝状遺構1条(SD 1)・性格不明遺構1基(SX 1)を検出することができた。

SK 1～4については、耕作などにより削平を受けているため残存状況はよくない。SK 1～3は、木棺痕跡を有するものや木棺の緊結に用いられたと考えられる釘がみられることから墓壙と考えられる。SK 4については、木棺痕跡など検出できなかったが、SK 1・3が近接して位置し何らかの関係を窺わせており、SK 4についてもSK 2との関係が考えられることからここでは墓壙としておきたい。SK 3・4については、規模などから小児用と考えられる。SK 1・2については、人骨など出土していないため明確にはで



第25図 SX 1 実測図 (1:20)

きないが側臥屈葬した成人用の墓壙と考えられよう。

S K 1～4 の時期については、角釘が出土しただけで明確にできる遺物はない。しかし、
江戸時代中期以降に比定されている、三次市糸井町の糸井古墓群中の第6号古墓出土の鉄
釘と長さなど類似性がみられることや、明治時代頃には付近に民家があったと伝えられて
いることから、この頃には墓地の存在が忘れられていたと考えられる。また、周辺には中
世まで遡る遺物がみられないことなどからも近世頃と考えられよう。

S D 1については、地元の人の話によると調査区付近に明治時代頃に建てられた民家が
あったとのことである。S D 1の規模については、調査区外に延びるため明確にできない
がこの民家に伴う雨落溝の可能性があろう。

註 財團法人広島県埋蔵文化財調査センター 「糸井古墓群発掘調査報告」—県営圃場整備事業
糸井地区に係る埋蔵文化財発掘調査一 昭和59(1984)年

VIII. 福正寺北5号遺跡

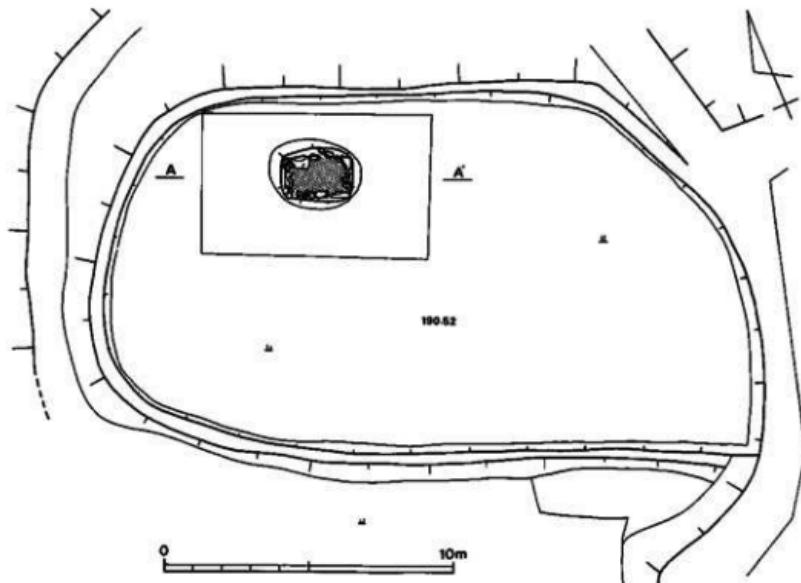
1. 遺跡の概要

福正寺北5号遺跡は、三次市和知町205-1番地に所在し、今回調査を実施した遺跡の中で最高所（標高190.5m）の水田中に位置している。調査区のある水田の東側（山側）は、以前に開墾が行われ畑などが存在していたが現在は山林となっており、現状では水田の最高所にあたっている。

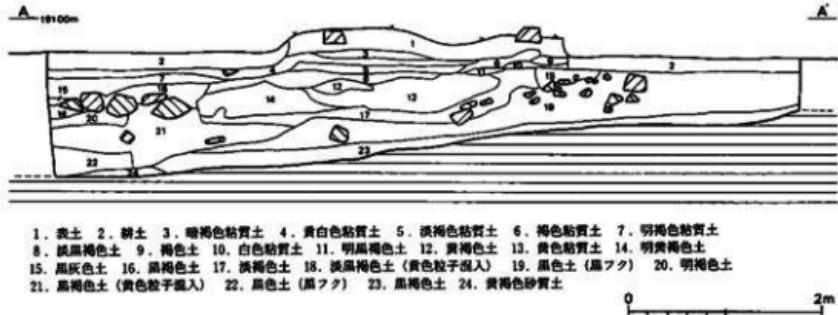
調査前には、長さ約2.5m、幅約1.5m、高さ約20cmの基壇状の高まりが存在し、上面には多量の五輪塔・宝鏡印塔がみられた。調査は、この基壇状の高まりを中心に調査区を設定し、土層観察用畦を残して掘り下げ遺構検出を行った。

2. 遺構と遺物

調査の結果、基壇状の高まりについては、土層観察などから開墾時の盛土の上に位置していることから中世にまで遡るものではないことが判明した。遺物は、この高まりの上面から出土した五輪塔・宝鏡印塔以外に、近～現代頃と考えられる陶磁器が少量出土した。



第26図 調査区位置図 (1:200, アミ目は石塔出土範囲)



第27図 土層断面実測図 (1:60)

出土遺物

石塔 (第28図、図版23)

五輪塔 (41~57)・宝篋印塔 (58~61) があるが、いずれも残欠で組合せは不明である。

五輪塔

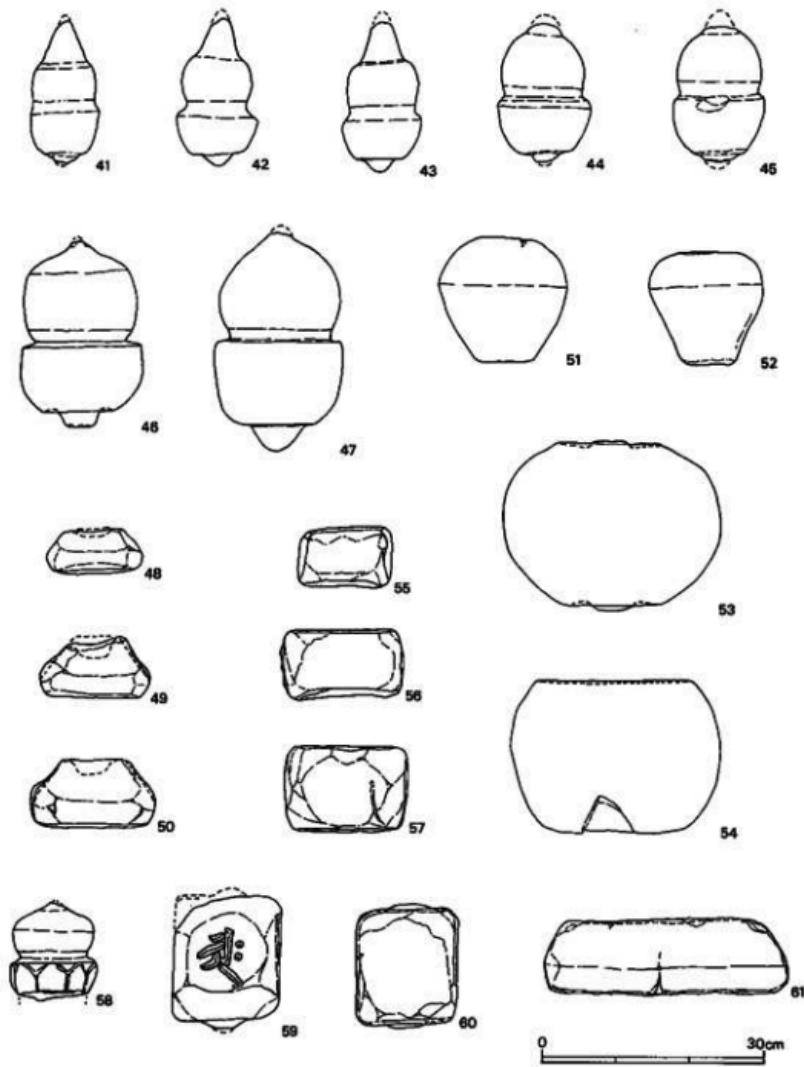
41~47は空風輪である。41~43は、小型・扁平気味で、空輪の先頂部が大きく突出している。44・45は、小型ではあるが丸みを持ち、空輪の先頂部が大きく突出しないと考えられる。46・47は大型で形が整っている。48~50は小型の火輪である。上面には円形と考えられる柄穴がある。風化が著しい。51~54は水輪である。51・52は小型の臺形である。53は、胴部が張り上・下面に柄がある。54は胴部の張りが少ない。55~57は小型の地輪である。石質は、41~45・48~52・54~57が結晶質石灰岩で、風化がみられる。46・47・53は花崗岩である。

宝篋印塔

58は相輪で、上段の諸花より下を欠損している。諸花は単弁である。59・60は塔身である。59は4面に種子が陰刻されている。下面には円形の柄がある。上面については、欠損しているが柄が存在していたと考えられる。60は上・下面に円形の柄がある。61は基礎である。上面は1辺が約25cmの正方形である。石質は58が花崗岩で、59~61が結晶質石灰岩で、風化がみられる。

3. 小結

調査の結果、基壇状の高まりは中世にまで遡るような遺構でないことが判明した。この付近は大正頃に開墾が実施され、そのときに高まり部分に木があり、ここに石塔を寄せ集めたと考えれる。なお、高まりの上面にみられた石塔については、開墾時に周囲にあったものをこの場所に移したものと考えられる。このことから、周辺には、古墓が存在してい



第28図 調査区出土の石塔実測図（1：8, 41～57は五輪塔, 58～61は宝蓋印塔）

たことが窺われる。

IX. ま　と　め

福正寺北遺跡群の調査では、本県で調査例の少ない近世～近代頃の遺構を検出した。また、中世の石塔類も存在しており、本遺跡群の時期は中世まで遡ることが推定された。各遺跡の時期・性格などについては本文のとおりである。ここでは、遺跡群成立前後の地理的状況や遺跡群が示す性格などについて述べまとめとしたい。

本遺跡群は地形からみると段丘上に位置し、遺跡群東方に存在する低丘陵の西麓にあたるが、この一帯は深い谷地形が発達していないため用水は不十分である。わずかに上大綱古墳付近と1号遺跡付近に谷水が流れている程度である。このような水利状況からすると本遺跡群付近は水田經營に適さない地形であったことが知られる。本遺跡群付近が本格的に開墾が実施されたのは、溜池などの灌漑施設が整った大正時代末期～昭和初期頃と言われており、開墾以前は雑木林や荒地、畠であったと思われる。また、1号遺跡の高まりの上に祠が存在していたと言われており、遺跡のすぐ北側に谷水が流れていることを考えると、この祠は田の神など水や農業生産に関するものであったと推定される。

本遺跡群が存在する段丘上の一帯には中・近世頃の墓が点在しており、4号遺跡の墓壙や2・5号遺跡の石塔類の存在からすると、開墾以前にはさらに多くの中・近世の墓が存在していたと推定される。また、本遺跡群の南東には、寺の前・福正寺といった寺に関係する地名がある。文献などに記載されていないが、地元に寺院があったとの伝承や石塔類もあり、寺院が建てられたことは十分考えられる。この寺院が廃寺となった時期は明らかではないが、付近の石塔類からすると近世初頭頃と考えられる。本遺跡群の石塔類のなかに中世末～近世初頭と考えられるものがあるが、この寺院との関係は現在のところ明らかでない。

ところで、2号遺跡で明らかになった基壙をもつ建物や掘立柱建物は社堂のような建物が考えられるが、このような建物がどのような経緯から建てられたのか、現在では伝承などないため明確にできないが、同じ場所に何回もの建替えを行っていたことが考えられることや、石塔類が出土していることからすると、この地域の有力者が供養のために建てた可能性が考えられる。

今回の調査は当初、古墳・古墓として実施したため、調査範囲も限られ各遺跡ともに遺構の性格や遺跡の範囲確認など十分に明らかになったとはいえないが、県内で類例をみない社堂と考えられる建物跡などを確認することができた。今後、山間部の中・近世村落内におけるこれらの遺跡のあり方を知るうえでいっそうの調査研究が必要となろう。



a. 遺跡群遠景（南から）



b. 同上（西から）



a. 調査前近景（北から）



b. 調査状況



a. 土層断面（北西から）



b. 調査後全景（北西から）



a. 調査前近景（西から）



b. 調査状況



a. 調査後全景（西から）



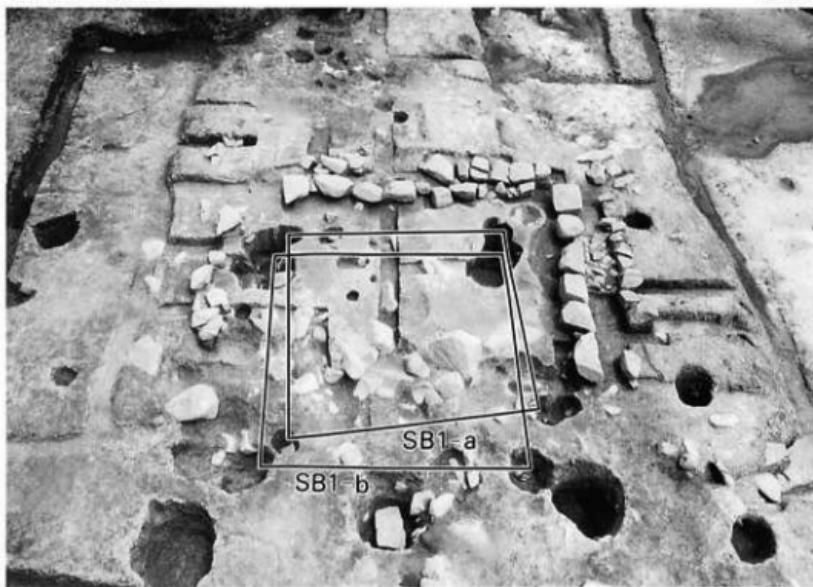
b. 調査状況



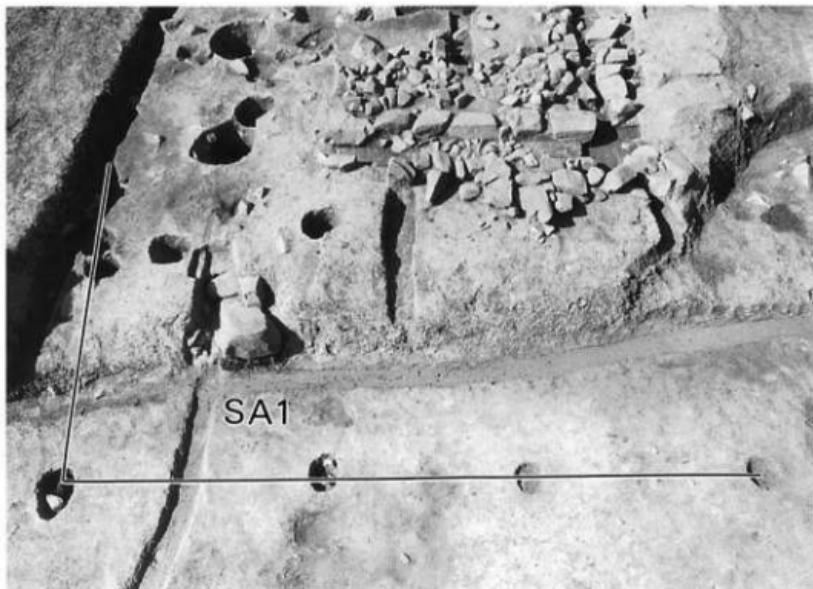
a. 基壇・石列検出状況（東から）



b. 基壇検出状況（西から）



a. 基壇土除去後（西から）



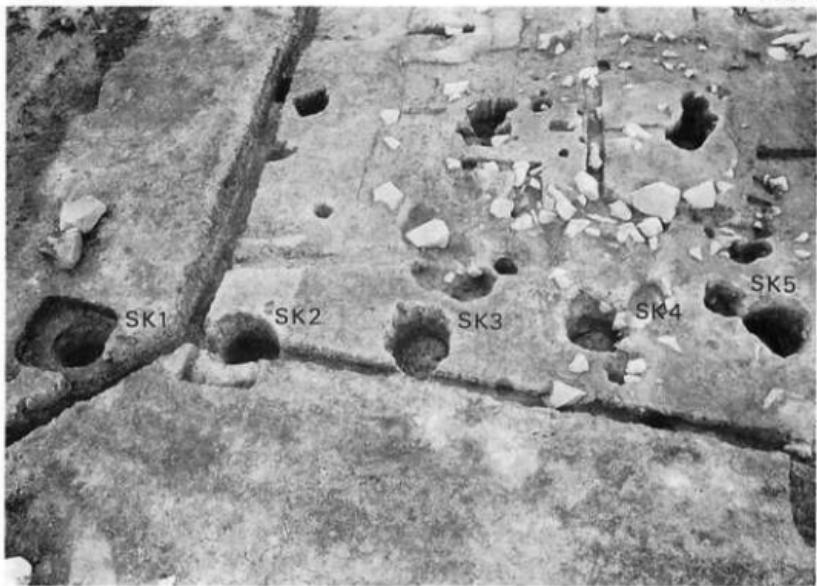
b. SA1（南から）



a. 基壇南辺部（西から）



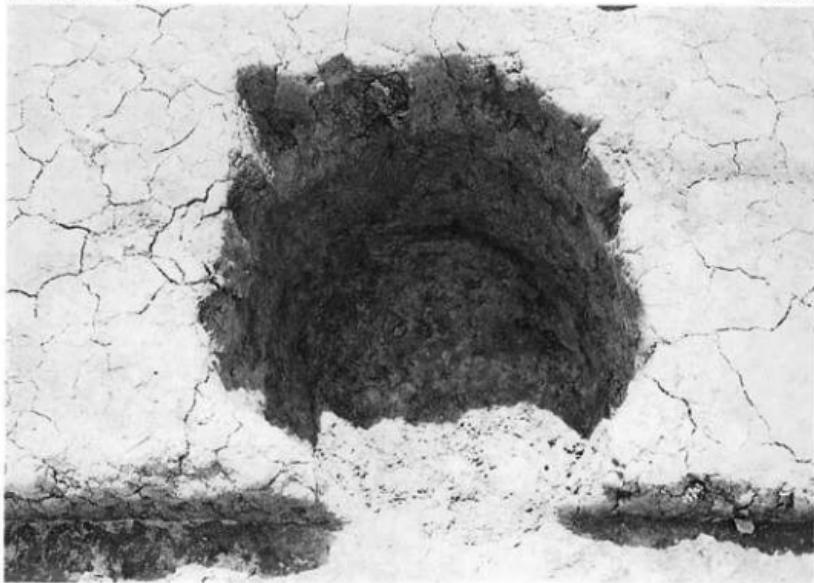
b. 同上南東隅（南西から）



a. SK 1~5 (西から)



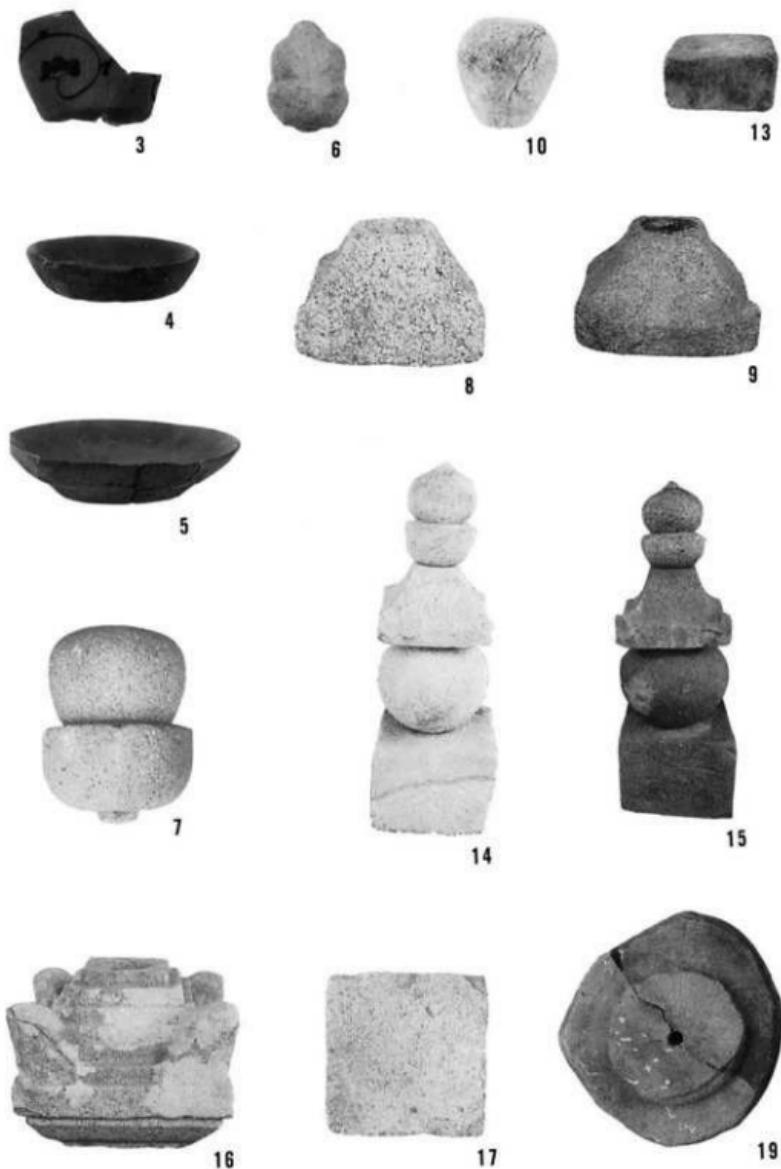
b. SK 2 (北西から)



a. SK 3 (北西から)



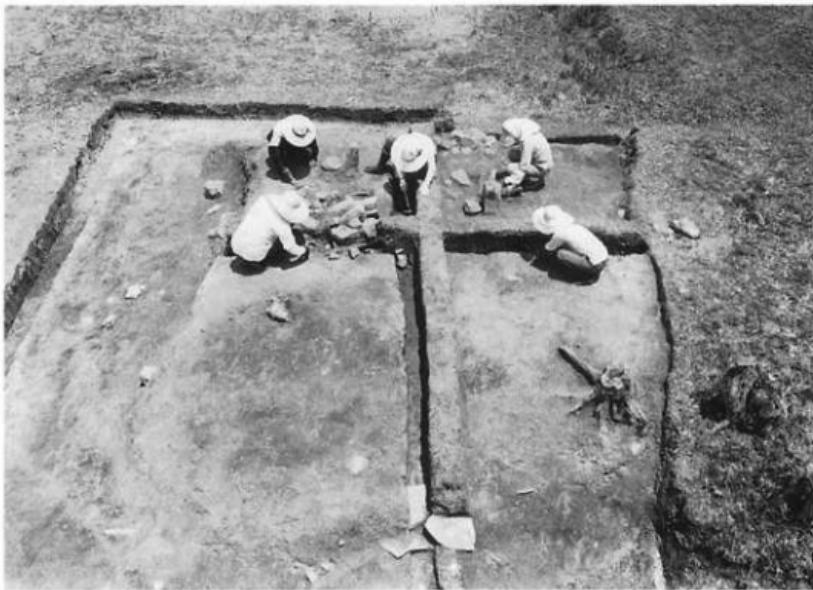
b. SK 4 (北西から)



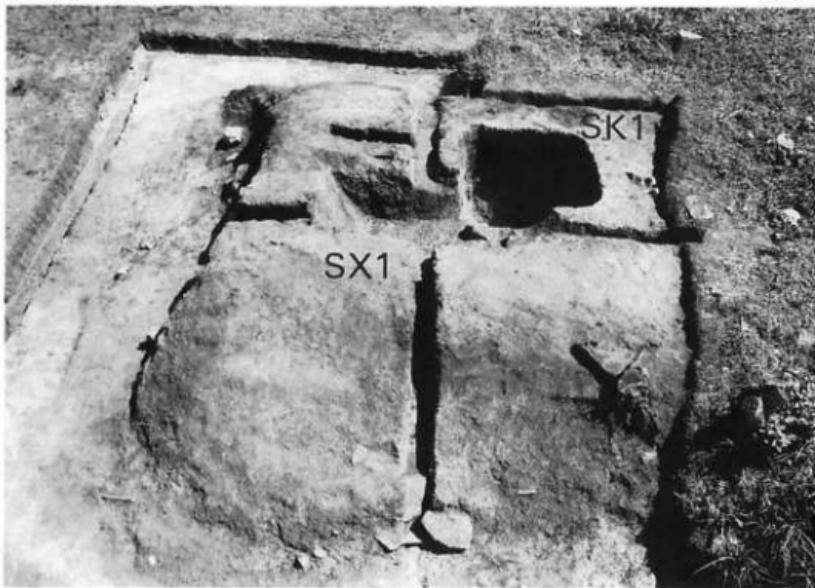
出土遗物



a. 調査前近景（西から）



b. 調査状況



a. 整地土上面調査後全景（南から）



b. 地山上面調査後全景（西から）



a. SK 1検出状況（北から）



b. 調査状況



a. SK 1木棺・人骨出土状況（南から）



b. 同 上 除去後（東から）



a. SX 1 碾検出状況（北東から）



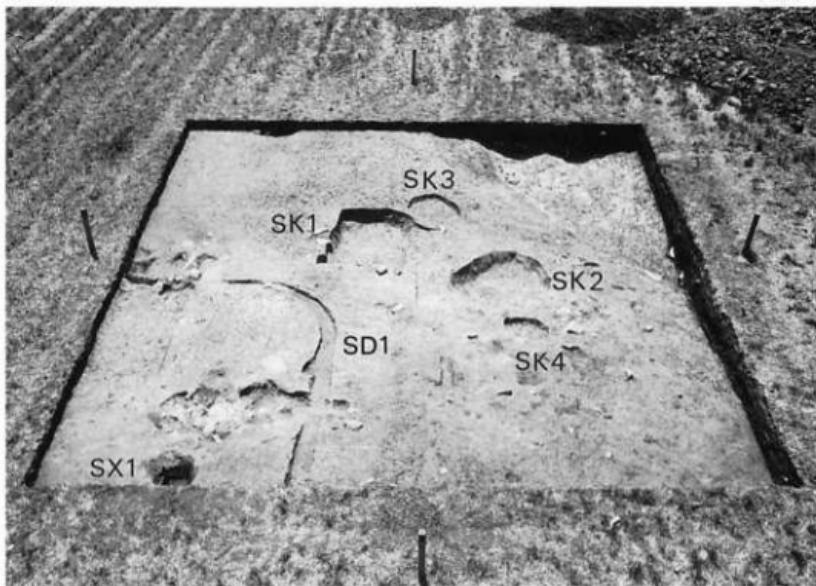
b. 同上 碾除去後（北東から）



a. 調査前近景（西から）



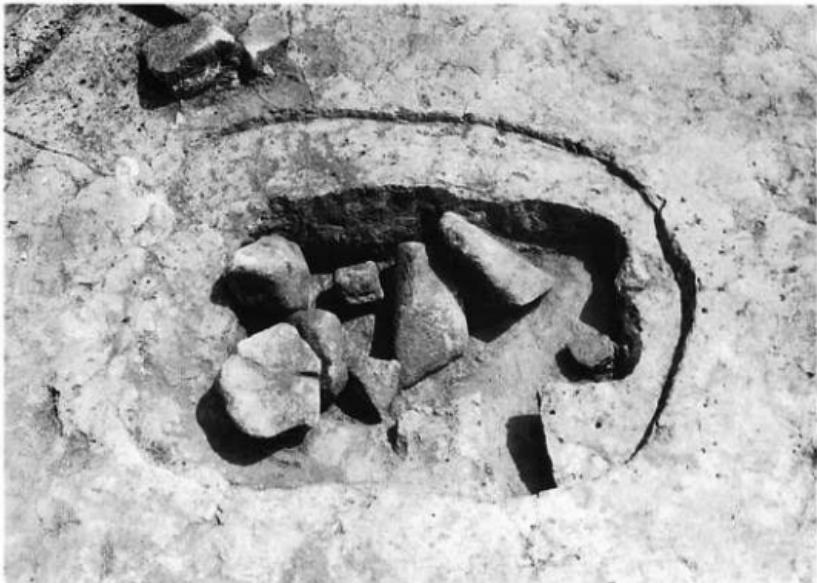
b. 調査状況



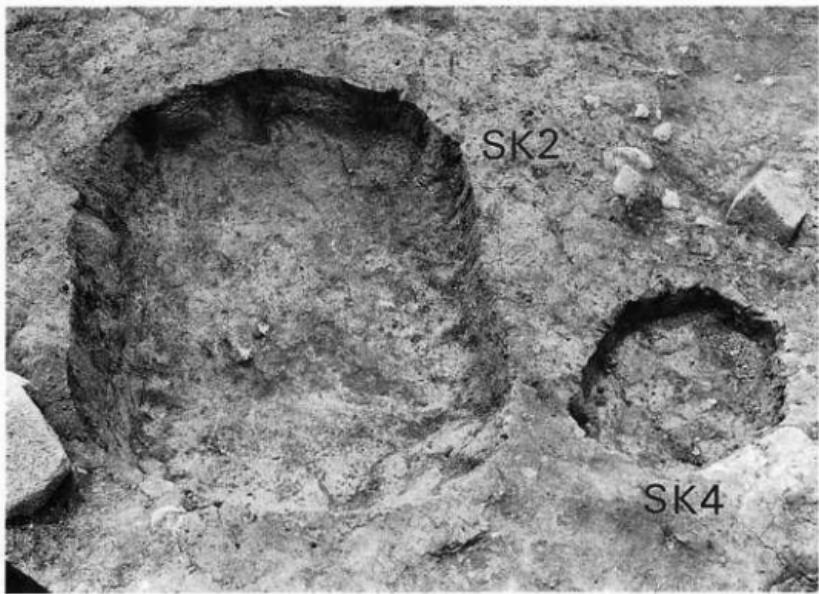
a. 調査後全景（北東から）



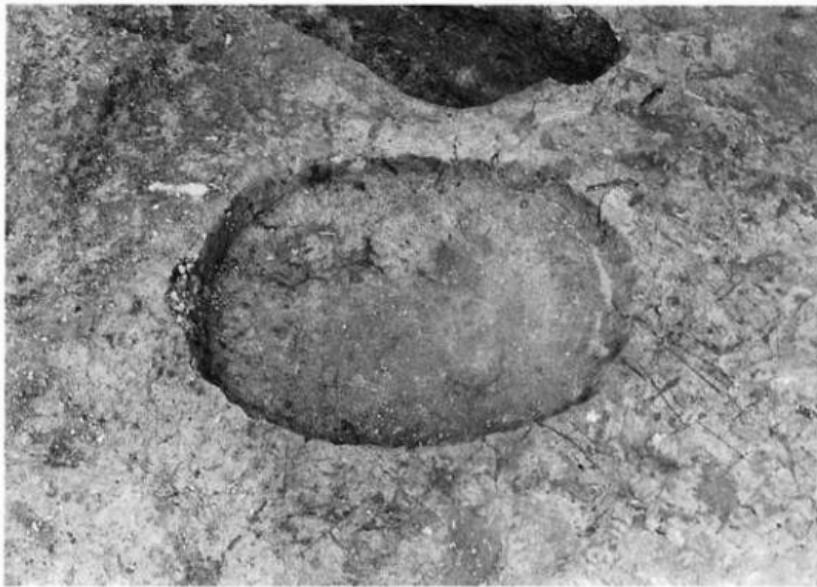
b. SK1（南東から）



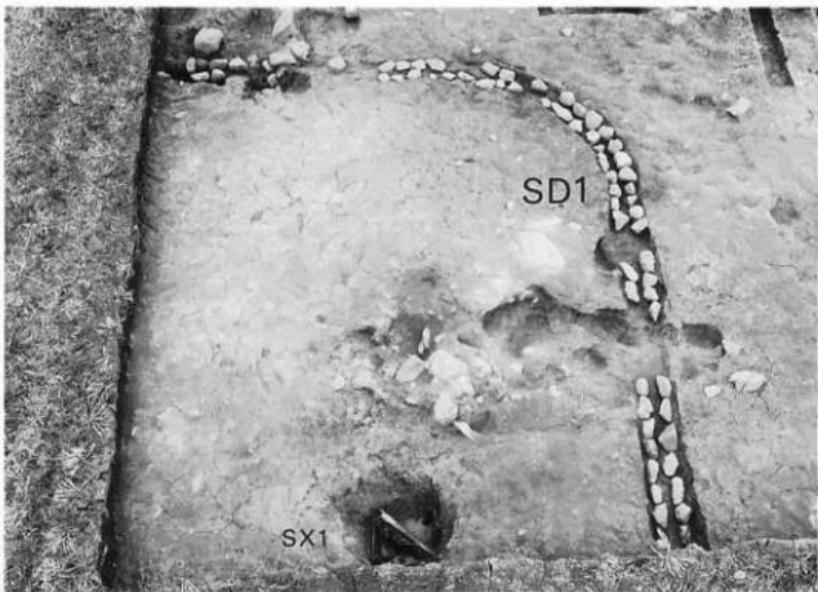
a. SK2 検出状況（北西から）



b. SK2・4 (東から)



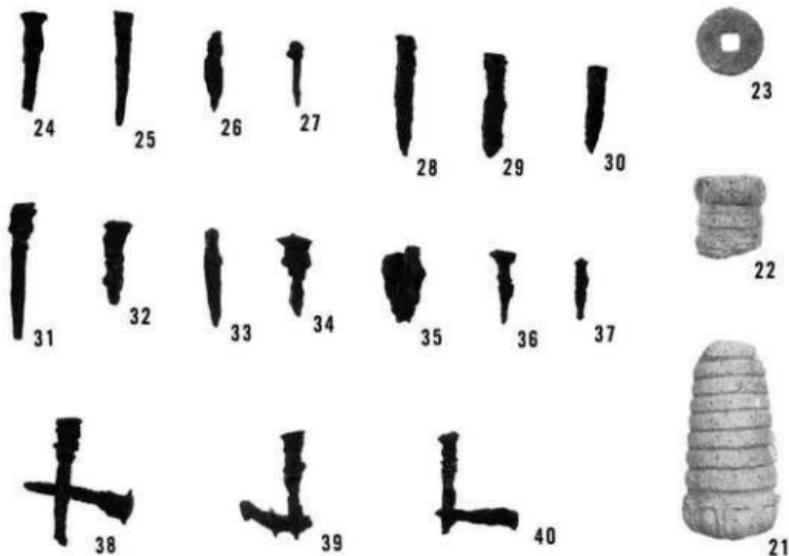
a. SK3 (西から)



b. SD1検出状況 (北東から)



a. SX 1 検出状況（南東から）



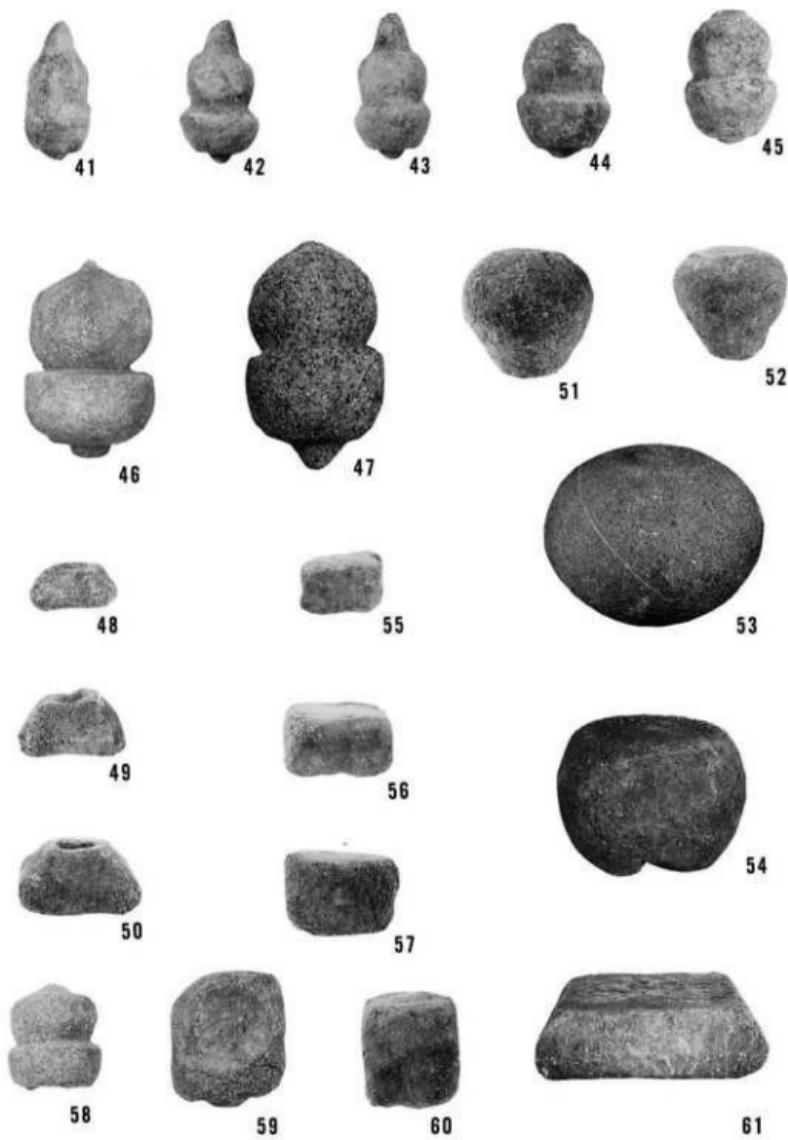
b. 出土遺物



a. 調査前近景（南西から）



b. 調査後全景（西から）



出土遺物

広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書 第87集

福正寺北遺跡群

発行日
平成2(1990)年3月

編集・発行
財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター
〒733 広島市西区緑音新町4丁目8-49
TEL (082)295-5751

印刷所
産業興株式会社